

# コロジオン湿板時代の 2 人の肖像写真家 ルイス・キャロルとキャメロン夫人

中 崎 昌 雄

はじめに

1. Daguerre「銀板写真」と Talbot「カロタイプ」
2. 「名刺写真」と写真産業
3. 「芸術写真」の試み
4. Carroll—写真を始めるまで
5. Carroll—1855 年 9 月写真の始め
6. Carroll—1862 年 7 月 4 日 Alice「あの金色の午後」
7. Carroll—1864 年 7 月 Cameron 夫人との出会い
8. Cameron 夫人—1848 年イギリス帰国まで
9. Cameron 夫人—1863 年写真開始まで
10. Cameron 夫人—1864 年 1 月「私の最初の成功」
11. Cameron 夫人—豊かな収穫期 (1867-70 年)
12. Cameron 夫人—Tennyson「国王の牧歌」挿絵写真と彼女の死
13. Carroll—1880 年写真放棄からその死まで

付 録

Julia Margaret Cameron「私のガラスの家の記録」(1874) (翻訳)  
(Annals of My Glass House)

はじめに

イギリス写真史家 Helmut Gernsheim (1913- ) は大版 599 ページにおよぶ大著「The History of Photography」(初版 1955, 増補第 2 版 1969) で知られている<sup>(1)</sup>。この手の大部の写真史にはオーストリア写真化学者 Josef Maria Eder (1855-1944)「Geschichte der Photographie」(増補第 4 版 1932, 1108 ページ) が知られているだけであった<sup>(2)</sup>。Eder「Geschichte」確かに優れているのだが、自分の専門とする写真化学に偏りすぎている。また次つぎと増補を加えたため、継ぎはぎが目立ち、全体

として統一に欠けている難点があった。

それに引き換え Gernsheim 「History」は広く文化史としての観点から写真発達史を捉えている点に特徴があって歓迎された。現在にいたるまで標準的「写真史」としての地位を不動の物としているのはそのためである。また Gernsheim 「History」は適切な挿話を広い分野から克明に拾い上げる努力をして、写真が社会に果たす多くの機能に対しての目配りが行き届いている点でも定評がある。なかでも「芸術メディア」としての写真の役割に重点を配置するのを忘れていない。これは Eder 「Geschichte」にほとんど見られなかった姿勢で、もともと Gernsheim が美術史研究から出発した経歴に関係があるのだろう<sup>(3)</sup>。

Gernsheim の写真研究第1作が次の著書であるのもこの点から肯ける。「Julia Margaret Cameron—Her Life and Photographic Work」(1948)<sup>(4)</sup>「まえがき」によると Gernsheim は写真史研究の始めからアマチュア肖像写真家としての Cameron 夫人の作品は知っていたが、その「eccentric」な性格についてあまり知るところがなかったと言う。それが、あるとき冬の夕暮れロンドン行きの列車を Brockenhurst 駅の待合室で待っていて、11枚の見慣れた人物の肖像写真が壁に架けてあるのに気が付いた。

これらには撮影された人物の自筆署名がついていた。Charles Darwin, John Herschel 卿, Tennyson, Longfellow などである。

その中のあるものには次のような説明文が記入されていた。

「この待合室に掲げる当代の傑出した人びとの写真は Cameron 夫人によって寄贈された。4年間もセイロンにいた彼女の子息に 1871 年 11 月 11 日ここで再会した喜びを記念するためである。」

いかにも Cameron 夫人らしい「エキセントリック」な行動が、彼女のアマチュア肖像写真家としての活動をより深く調査し、一冊の本に纏めるにいたった動機であると言う。

英語辞典には「エキセントリック」のところに形容詞「並はずれた、常軌を逸した、風変りな」、名詞「変人、奇人」などとある。

日本では「エキセントリック」と言うと悪い意味に取られ勝ちであるが、外国とくにイギリスでは美德とは言わないまでも、ある面では優れた個性と理解する傾向がある。

Gernsheim は Cameron 夫人を調べていて、同時代のもう 1 人の「エキセントリック」なイギリス人アマチュア肖像写真家と出会うことになった。それが「不思議の国のアリス」(1865) で有名な Lewis Carroll である。Gernsheim の Carroll 研究の成果は Cameron 研究出版の 1 年後に発表された。

「Lewis Carroll-Photographer」(1949)<sup>(6)</sup>

この本は第 2 版 1969 年 Dover 版が出て広く知られるようになった。

私が 1976 年 2 月に購入したのもこの版である。私はそのころ専門の有機立体化学の中で「分子不斉」の研究をしていて、主に有機化合物分子の右と左に関心を持っていた。

Lewis Carroll 「鏡の国のアリス」(Through the Looking-Glass and What Alice Found There) (1871) は、その名のとおり「鏡の国」の物語で、像とその鏡像の左右に関するトピックスに事欠かない。たとえば酵素化学的にみて面白いのは第 8 章「It's My Own Invention」に出て来る「白の騎士」(White Knight) の台詞である<sup>(6)</sup>。

「右の足を左の靴にメチャクチャに押し込んでさ。」(madly squeeze a right-hand foot, into a left-hand shoe)

こんな事から Lewis Carroll に興味をもって、Gernsheim 「Lewis Carroll」を買ったのであったが、当時は Carroll の写真その物についての関心はほとんどなかった。それが大阪大学定年退職後の 1985 年になってから、万延元年 (1860) に福沢諭吉がサンフランシスコで「写真屋の娘」と一緒に撮った写真を研究する巡り合わせになった<sup>(7)</sup>。諭吉のもっとも若いときの写真である。これは私が大阪大学でながく適塾管理運営委員をしていて諭吉がこの「適塾」の出身者だったからである。

それで「写真史」なる物の勉強を始めたのであるが、多くの写真史ではフランス人 L. J. M. Daguerre (1787-1851) 「ダゲレオタイプ (銀板写真)」(1839) についての記載が多い割には、イギリス人 W. H. Fox Talbot (1800-77) の業績についての記載が少ないのに気が付いた。しかも誤りが多いのである。たとえば Talbot 1839 年発表「光写生」(photogenic drawing) と 1841 年発表「カロタイプ」(calotype) の混同がある<sup>(8)</sup>。

Talbot 「カロタイプ」は還元剤による「潜像」の「現像」と、焼き付け

で複製ができる「ネガポジ」方式によって、現行の写真術の原点に位置づけられている。ところが残念ながら、このプロセス発見の経緯に関する記載が極端に少ない。

それで私はいわば「義憤に駆られ」て Talbot を調べ始めた。そして彼の友人である John Herschel (1792-1871) に遭遇した<sup>(9)</sup>。私は子供のときからの星好きで、John の父親 William Herschel (1738-1822) の天王星発見 (1781) や、その妹 Caroline (1750-1848) のことは知っていた。

しかし William の一人息子 John については、ほとんど知るところがなかったのである。

ところが John は 1819 年に「ハイポ」(チオ硫酸ナトリウム) を合成し、1839 年になってからはこれを写真「定着」に始めて応用して成功している<sup>(10)</sup>。John にはこの他にも「ハーシェル効果」の発見、「青写真」の発明など写真研究で優れた業績が多い。

John は父親 William の「北天観測」を南天にまで広げる目的で、1833 年一家を挙げて喜望峰に向い、写真発表騒動の一年まえの 1838 年になって帰国した。この喜望峰滞在中の 1836 年に、ここで結婚前の Cameron (Julia Margaret Pattle, 21 歳) と知合いになった。彼女はたまたま病氣療養で滞在していたのである。彼らの交際は 2 人がイギリスに帰ってからも続き、Cameron 夫人は John の Kent 県 Hawkhurst の Collingwood 邸に写真機材を積んだ馬車で押し掛けて滞在して、John の多くの肖像写真を撮って有名になった<sup>(11)</sup>。

Gernsheim 「Julia Margaret Cameron」は 1975 年になってニューヨーク Aperture 社から第 2 版が出て入手しやすくなった。

私が参考にしているのはこの第 2 版である<sup>(4)</sup>。

以上のような次第で知らず知らずに私と縁ができたこの 2 人について、そのアマチュア肖像写真家としての側面を紹介しようと言うのが小論の目的である。今までの私の写真史についての論考は、重点が私の専門とする化学に偏りすぎる嫌いがあった。以下に 2 人の「エキセントリック」肖像写真家 Lewis Carroll と Cameron 夫人の業績を紹介するのは、少しでもその欠を補いたいという意図からに他ならない。

### 1. Daguerre「銀板写真」と Talbot「カロタイプ」

Lewis Carroll (1832-98) は Julia Margaret Cameron (1815-79) より 17 歳年下だが写真を始めたのは Carroll の方が早い。Carroll が 24 歳 1856 年 4 月から写真を始めたのに対して、Cameron 夫人が娘夫婦から贈られたカメラで肖像写真を撮り始めたのは 48 歳 1864 年 1 月からである。Carroll の方が 8 年も早い。2 人が使ったのはガラス板の上にコロジオン液を塗る「コロジオン湿板」法である。

つぎに Daguerre「銀板写真」Talbot「光写生」(1839) から、このコロジオン湿板法 (1851) にいたる写真術の進歩を簡単に展望しておこう。

Daguerre「銀板写真」(ダゲレオタイプ) の公開発表は 1839 年 8 月 19 日フランス科学学士院と芸術院の共催で行われた。手法の詳細は次の日に売り出された小冊子「ダゲレオタイプ教本」で知ることができ、このときからパリ市民は「Dagerreotypomania」に取り憑かれた<sup>(12)</sup>。銀板写真では文字どおり銀メッキ銅板を使う。この銀面をよく磨いて、これをヨウ素蒸気に触れさせると黄金色のヨウ化銀膜ができる。これをカメラにに入れて露出してから加熱した水銀槽の上におくと、水銀蒸気は光の当たった部分とだけアマルガムをつくる。あと濃食塩水で洗って定着する。水洗、乾燥した物を斜めからみるとアマルガム部分が白く反射して「陽画」に見える。ただし「反射光」で見るのであるから左右反対の鏡像となる。

5 年前から研究していた Talbot も急いで彼の手法「光写生」を公開した。彼の方法では白紙を使う。白紙に食塩水を塗ってから乾燥した物に、硝酸銀水溶液を塗って塩化銀紙をつくる。これをカメラに入れて露出してから濃食塩水またはヨウ化カリウム水溶液で定着する。できるのは白黒反対の「陰画」であるから、さらに塩化銀紙に焼付けて「陽画」にしなければならない。これは欠点のようではあるが、1 枚の陰画から欲しいだけ陽画が複製できるから点で利点でもある。銀板写真では複製が困難である。

1839 年発表当時の銀板写真も光写生もともに、明るく照らされた建物を撮るのに 30 分程度の露出を必要とした。これでは生身の人間の写真を撮るのは無理である。しかし 1841 年になって共に露出が 30 秒から 1 分程度に短縮されることとなった。これを可能にしたのは銀板写真では「クイック」剤の開発、光写生では「潜像」の「現像」発見である。銀板写真

「クイック」剤はヨウ素だけの代わりにヨウ素に臭素や塩素を混ぜた物である<sup>(13)</sup>。これからの蒸気で銀メッキ銅板を処理する。

Talbot の方はこの「現像」を取り入れた新しい手法を「カロタイプ」と呼んでこれにイギリス特許をとった (1841)<sup>(14)</sup>。カロタイプで主役を演じるのは希酢酸に硝酸銀と没食子酸を溶かした銀液 (gallo-nitrate of silver) である。硝酸銀水溶液を塗って乾かした紙をヨウ化カリウム水溶液に浸けてから乾かす。この紙に上の銀液を塗って感光紙をつくる。これをカメラに入れて露出してから、この上にさらに銀液を塗って現像し、あとハイポ水溶液で定着する。このころになると銀板写真でも John Herschel が発明した (1839) ハイポ定着を使用している。露出がこのように短縮されると銀板写真、カロタイプともに肖像写真撮影が可能となる。1883 年 8 月 Daguerre の生地 Cormeille に彼の記念碑が建てられたとき、友人の画家、写真家 E. Carjat (1828-1906) が「貧乏人のための技術」(L'Art du Pauvre) なる長詩を捧げた<sup>(15)</sup>。銀板写真ができて始めて貧乏人でも自分の肖像画が手に入るようになったのを称えたのである。それまで肖像画は高額の謝礼が払える王侯貴族と富豪の独占物であった。

フランスではそのとおりでも、イギリスでは事態はそう簡単ではなかった。銀板写真とカロタイプの特許が邪魔をしていたのである。Talbot の友人スコットランド St Andrews 大学学長 David Brewster (1871-68) は Talbot にカロタイプ特許が自分の住んでいるスコットランドには適用されないように懇請した。同じ大学の John Adamson 講師が実験を始め、やがてその弟の Robert (1821-48) がエジンバラ市「Rock House」で 1843 年 5 月から肖像写真館を開業した。ちょうどそのころ画家 David Octavius Hill (1802-70) が 1843 年 5 月 23 日「スコットランド自由教会分離署名」会議の光景を絵にしようと考えて Adamson に助けを求めた。この会議に集まった 450 名の司祭の顔写真を撮ってくれと言うのである。これが写真史にその名が残る「Hill-Adamson コンビ」の始めである<sup>(16)</sup>。

2 人の共同作業はこの仕事のあとも続き、Adamson の健康が衰え始める 1847 年秋まで 3 年間まで続く。この間に彼らが撮った写真は 1500 枚におよぶと言う。対象は個人の肖像写真に限らず集合写真、風景写真までを含んで傑作が多く、彼らの作ったアルバムは世界中の美術館がもっとも

求めている物の1つに数えられている。

Talbotの方も自分のカロタイプ宣伝のために写真アルバム集「自然の鉛筆」(The Pencil of Nature)を刊行した<sup>(17)</sup>。これは6分冊とし1844年6月から始めて翌年の4月で完成した。アルバムと言っても現在のように写真印刷ではないから、全部1枚ずつ焼付けて本文解説の間に貼らねばならない。1分冊に平均4枚ずつ貼ったから全部で24枚であり、7ヵ月に2475枚を焼付けたと言う。

銀板写真と違ってカロタイプでは特別な装置がいらないうえ、操作が比較的簡単で素人向きといえた。なにしろ銀メッキ銅板の代わりに、使うのが紙であるからこれだけでも経済的である。ただ焼付けると紙陰画の繊維の粗さが紙陽画にそのまま出る欠点があった。Talbotは蜜ロウをアイロンで紙陰画に浸み込ませて、透明にする工夫をしたがあまり改善にはならなかった。

それなら始めから紙を諦めてガラス板にしたよいだろうと誰もが考える。問題はどのようにしてハロゲン化銀粒子をガラス板に付着させるかである。この問題は1851年になってから一応の解決を見た。ロンドン素人写真家F. S. Archer (1813-57)が「コロジオン法」(collodion process)を発表したのである。1851年3月「The Chemist」誌発表の手法はまだ不備なところが多かったが、3年後に自家出版した「The Collodion Process on Glass」で始めて実用的な写真手法としての体裁を整えた<sup>(18)</sup>。この手法では硝酸セルロース（綿火薬）を酒精-エチルエーテル混合物に溶かした粘稠なコロジオン液にヨウ化カリウムを溶かした物を使う。左手指でガラス板を支えて持ち、その上にコロジオン液を注いでガラス板の表面を覆い、あまりの液を瓶にもどす。溶媒が蒸発しきって硬い膜にならない内に、ガラス板を硝酸銀水溶液の中に浸す。これを硝酸銀浴から引き上げて、「濡れているうちに」撮り枠に移し、カメラに入れて露出撮影する。露出はガラス板の大きさにもよるが明るい戸外で5秒ほど、明るい室内では30秒ほどを必要とした。撮影が済んだら撮り枠から出して「濡れているうちに」左手指で支えて、このうえにピロガロール水溶液を注いで現像する。現像後はすぐにハイポ水溶液を注いで定着しなければならない。あと十分に水洗してから乾燥し、ふつうこの上にニスを塗って表面を保護した。

コロジオン法に「湿板法」(wet-plate process)と言う別名があるのは、この「濡れているうちに」と言う条件が絶対に必要だったからである。露出、現像のときまで「濡れたままの」状態におかないと極端に感度が低下するのである。硝酸銀水溶液で「濡れたまま」のガラス板を取り扱うのであるから、指、衣類、机、床などにこの溶液が付着するのは避けられない。するとここに消えない黒い「染み」を残す。このころ写真術全体が「black art」(本来の意味は「魔術」「手品」と呼ばれたのはこのためである。また黒い「染み」のついた手をしている写真師は「marked man」(もとの意味は「注意人物」「札付き」と呼ばれた。この「濡れたまま」という条件は自分の家の暗室ならなんとかなるが、これを戸外で守るのは大変である。「濡れたまま」であるから撮影する場所は暗室から歩いて5分以内である必要がある。このため自宅から離れて撮影しようとする「移動暗室」「携帯暗室」に薬品、器具一切それに水まで携行しなければならなかった。「イーストマン・コダック」社の創設者 George Eastman (1854-1932) は自分が写真を始めた 1877 年ころを回想して次のように書いている<sup>(19)</sup>。

「当時はチョイとカメラだけを持っては行けませんでした。撮影道具一式が必要でカメラはその中の一部に過ぎませんでした。私はその一式を買いましたが、戸外の写真家は強健な身体だけでなく、勇敢さも必要とされるのを知らされました。私の一式はぜひとも必要な物だけに限られましたが、それでも蜜柑箱 (soap box) ほどのカメラ、バンガローでも載せられるほどの重くて頑丈な三脚、大きな撮り枠、暗室テント、硝酸銀槽、それに水の入れ物までありました。撮り枠の中のガラス板は現在のようにすぐには使えませんでした。いわゆる湿板と言うやつで、戸外でまずガラス板にコロジオンを塗ってから、露出の直ぐ前に硝酸銀浴に浸けて感光化せねばなりませんでした。このように硝酸銀浴はつねに携行せねばなりませんでしたが、旅行にもって行くのにこれほど邪魔になるものはありません。なにしろ腐蝕性ですからガラス瓶に入れて、固く栓をしなければなりません。硝酸銀と仲良くしても碌なことはありませんから。始めて硝酸銀液をもって行くとき、私はこれを入念に包んでトランクに入れました。ところが途中で栓が緩んで液が漏れ衣類のほとんどを駄目にしてしまいました。」



このように苦勞して作ったガラス陰画は次に印画紙に焼付けなければならない。Carroll, Cameron 夫人の時代にはすでに卵白紙（アルブミン紙）が市販されていたからこれを使った。紙の上に食塩を含んだ卵白を塗ってから乾かしたものである。当時、ロンドンの印画紙工場では年間 50 万個もの卵を消費したところがあったと言う。

この卵白紙を硝酸銀浴に浸して感光化し、あと乾燥して使用した。これは保存が効かなかったから、その日のうちに使い切ってしまうねばならない。感光化した卵白紙はこれをガラス陰画と重ねて焼付け枠に入れ、圧着してから直射日光に当てて焼付けた。現在と違って「焼き出し」（print-out）方式であるから数時間を要した。ときどき枠を開けて焼き具合を検査し、適当なところで焼付けを中止した。大ていの写真屋は日光焼付けのために屋上に「焼付け場」を備えていた<sup>(20)</sup>。

Archer「コロジオン湿板」法発表の 1851 年は Daguerre の死の年でもある。7 月 1 日の彼の死はこの 1851 年が写真技術史における 1 つの転換点であることを象徴的に物語るものと言えよう。写真技術の趨勢は急速に銀板写真からコロジオン法に傾斜しつつあった。この傾向に拍車をかけたのは、この年の 5 月 1 日に開場したロンドン第 1 回万国博覧会である。博覧会の写真セクションでイギリス写真家は始めて外国、とくにフランスから出品された多くの優れた紙写真作品に接することとなった。

イギリスではカロタイプによる撮影が Talbot カロタイプ特許で厳しく制限されていたのに、フランスではそれがかなり自由だったのである。

Talbot の主張によるとコロジオン法を使用するのも自分のカロタイプ特許の侵害である。これでは余りひどいと言うので、王立学会会長 Rosse 卿と王立アカデミー会長 Eastlake 卿が仲に立って次の年、1852 年 7 月に Talbot に手紙を書いて制限を緩めるように要請した。

Talbot は 7 月 21 日付の返事でただ 1 つの例外を除いて、自分の特許制限を撤回しようと約束した<sup>(21)</sup>。

「さて私が例外として、まだ確保しておきたいと願っている特許と言うのは、私の発明を利用して人に売ることを目的に肖像写真を撮ることです。ただこの分野に従事する人は当然ながら比較的少人数に限られます。」

「Illustrated London News」紙8月28日号はこの報に接して次のように喜びを表明した。

「とうとう法律に触れることなく、肖像写真が撮れる方法が生まれた。われわれ大衆は Archer 氏に感謝しなければならないだろう。」

このような機運に乗って、この年の12月22日にイギリスでは初めての大きな写真展がロンドンで開催される運びとなった。始めの計画では12月28日まで1週間の予定のところ、評判がよいので次の年の1853年1月29日までの1ヵ月間に延長した。ここでは印画写真だけで銀板写真の作品は展示しなかった。

このとき写真手法の分布はおおよ次のとおりであった。

カロタイプ (38%), コロジオン法 (34%), ワックス紙写真法 (18%)  
写真展の開催期間中の1853年1月20日、この会場の部屋を借りて待望の「写真学会」設立総会が持たれた。そして機関誌「Journal of Photographic Society」第1号が3月3日に発刊となった。

ヴィクトリア女王と夫君アルバート公はともに写真好きで、ウィンザー城の中に暗室を作らせていたくらいであるから、すぐにパトロンとなって写真学会を後援してくれた。

カロタイプ特許の制限を緩めたと宣言したものの、Talbot は相変わらずコロジオン法は自分のカロタイプ特許の範囲内だと主張して、コロジオン法で肖像写真を撮って営業する写真館の告訴を止めない。このこの係争に係わる裁判でもっとも有名なのは、1854年12月18-20日にわたる「Talbot-Laroche」裁判である<sup>(22)</sup>。この裁判は Talbot の敗訴に終わり、カロタイプ特許は1855年2月で切れることになった。Daguerre 銀板写真特許はすでに1853年8月に切れていたから、ここに始めてイギリス人はなんらの制限もなく自由に写真が撮れるようになったのである。

## 2. 「名刺写真」と写真産業

このように肖像写真館営業の制限がなくなった結果、イギリスとくに大都会では肖像写真館が急増した。Gernsheim「History」は当時のイギリス全土の国勢調査の結果を挙げている<sup>(23)</sup>。それによると、いわゆる写真屋の人口は1841年でゼロであるのに、1851年には51人となり、それが10

年あとの1861年では2800人にまで増加している。もちろん、これら写真屋が使うカメラ、付属品、薬品、器具などの生産を支えている人間もこれに伴って増加しているはずである。1860年当時パリでは何らかの形で写真に関係して生活している人口は約33000人だったと言う。

ただしコロジオン法が普及したからと言って、全ての肖像写真館がただちに紙写真に乗り換えたわけではない。銀板写真はその細やかな諧調と精緻な工芸品としての美しさのために、上流階級ではとくにかなり長く珍重された。これが1856年ごろから急速に衰え始め、やがて1861年ころから始まるコロジオン法「名刺写真」時代に移行する。この中間期にガラス陽画「アンブロタイプ」(ambrotype)が一時流行をみた<sup>(24)</sup>。

これは「ガラス板の上のダゲレオタイプ」と呼ばれたように、焼付けをしないで始めからガラス陽画とする手法であった。露出を控え目にしたコロジオン湿板ガラス陰画の下に、黒い布などをおいて上からみると、銀粒子のところが白く光って陽画に見える。

1860年（万延元年）福沢諭吉がサンフランシスコで「写真屋の娘」と一緒に撮った写真はこのアンブロタイプである。1回の撮影で1枚しかできないのは銀板写真と同じであるが、これよりずっと廉価であり、待っているお客にすぐに手渡せると言う便利さがうけた。このため人の多い盛り場や海水浴の海岸などで流行した。

銀板写真とアンブロタイプに共通する、撮影してすぐに手渡せるという長所は焼付けを必要とする紙写真にはない。紙写真の場合は少なくとも1週間は待ってもらうのがふつうであった。

アメリカでは1861年から南北戦争が始まったが、この戦争を中心にして1860-65年にかけて一時「ティンタイプ」(tintype)がとくに戦場で流行をみた<sup>(25)</sup>。これはガラス板「アンブロタイプ」と金属板「ダゲレオタイプ」の合の子のようなものである。まず薄い鉄板に黒漆を塗って乾かし、この上にヨウ化カリウムを含むコロジオン液を塗る。これから後の操作はコロジオン湿板と同じである。アンブロタイプではコロジオン湿板ガラス陰画の下に黒い布をおいて見るが、ティンタイプではこの黒い布が始めから付いている物と考えたとよい。戦場の兵士が故郷の家族に自分の写真を送るのにガラス板のアンブロタイプでは途中で壊れてしまう恐れがある。

金属板のティンタイプならその心配はないし、材料が鉄板だから銀板写真より安くあがる。ただイギリスでは安物と見下げられてアンブロタイプより早く廃れてしまった。

この時代、写真産業をさらに推進させた要因に「立体鏡」(stereoscope)ブームがある<sup>(26)</sup>。なにしろ1851年水晶宮万国博覧会のころだけでも3ヵ月のあいだに25万台売れたと言うからその流行ぶりが分かる。

G. S. Nottage (1823-85) が1854年に始めた「London Stereoscopic」社だけで2年間に50万台を売り、このときすでに1万種類ものスライドを揃えていたと言う。世界中に写真家を派遣して珍しい写真を撮らせているのである。「家庭に1台立体鏡」(no home without a stereoscope)の時代である。

「名刺写真」(carte-de-visite)は文字どおり現行の名刺サイズの紙陽画である。肖像写真館では大きさ( $2\frac{1}{4} \times 3\frac{1}{2}$ インチ;  $57 \times 89$ mm)の紙陽画を少し大きめの台紙( $2\frac{1}{2} \times 4$ インチ;  $64 \times 102$ mm)に貼って客に渡した。この名刺写真のアイデアはAndré Adolphe Disdéri (1819-90)が1854年11月27日フランス特許を申請したことになっている。しかし同じ発想はすでに多くの人びとが実行していたので、Disdériの功績はパリを発信地としてこれを世界中に弘めたところにあるとすべきであろう<sup>(27)</sup>。

1859年5月Napoleon3世がイタリアへの遠征に先だって、Disdériの写真館で自分の肖像写真を撮らせたので評判が高くなった。

顧客が殺到して注文が裁ききれず、しまいには数週間まえから予約しなければ、撮影の順番が回ってこないという騒ぎにまでなった。

やがてイギリスに伝染し、アメリカ生まれの銀板写真家J. E. Mayall (1810-1901)がロンドンで営業を始めて大成功を収めた。彼が撮ったヴィクトリア女王を始めとするイギリス王室一家の写真は、当時女王一家がイギリス人から敬愛されていたこともあって、すぐに数10万枚が売り切れたと言う。有名な政治家、舞台人、作家などについても同じで、写真家は売れ筋の確実な「sure cards」を追いかけて写真を撮らせてもらった。

始め名刺写真は名刺と同じように、先方が留守のときに挨拶代わりに玄関先において帰るために考案された。それが次第に、これを交換し収集するのが流行し始めた。集まった写真はアルバムに貼る。そのうちに有名人

などの写真が本屋、文房具店の店頭で売り出されるようになった。

「名刺写真マニア」(cartomania)の始まりである。

このころから「家庭アルバム」は全ての家の応接間に欠かせない備品となった。これは第1次大戦のころまで続く。ヴィクトリア女王自身も収集マニアで110冊もの写真アルバムをもっていた言う。

プリント生産も大規模となり、最盛期にはイギリスだけで年間3億枚もプリントされたと記録にある。人気写真家 Mayall の収入が年間12000ポンドあったと言うがありそうな話である。こうなると焼付けも1つの産業となり、写真家は自分の撮った陰画の焼付けをプリント屋に出して販売させたりした。

写真屋も忙しいからお座なりの仕事をするようになる。流行した写真館では1日に100人のお客の写真を撮るのはふつうであった。実働8時間としても平均5分間に1人の割合である。これではポーズもマンネリにならざるを得ない。それに小さな名刺写真では顔はせいぜい1cm<sup>2</sup>程度にしかならないから表情の個性など表に出ない。背景はどこも同じ材料店で作らせたから、どの写真屋でも大して変わらなかった。深山幽谷にかかる滝を背景に当時流行した裾の広がったクリノリン・スカート (crinoline) の女性が艶然とほほえんでいる。だれもこの女性がどんな手段でこの山奥にまで辿りつけたかなど問題にしない。なにしろ彼女はあたしく買った着物が写ればそれで満足なのである。

しかし肖像写真と肖像画とでは根本的に違うところがある。肖像画を描くとき画家は客の好みに合わせて、それほど実物と離れない程度に美しく仕上げた。腕の見せどころである。客の「虚栄心」におもねた方が、評判がよく儲けにつながったからである。銀板写真時代にヴィクトリア女王がフランス生まれのミニチュア肖像画家 Alfred Chalon に質問したことがある。「写真ができたので、画家は生活に困ることにならないか？」

これに対して Chalon はフランス語訛の英語で答えた<sup>(28)</sup>。

「ノン。ノン。マダム女王さま。写真はお世辞が言えませんかね。」  
「着色」は銀板写真でもよく行われたが、銀板写真では「修正」が難しかった。しかし紙陽画になると着色はずっと容易になり、修正も陽画はもちろんガラス陰画の段階から施せるようになった。小型の名刺写真サイズでは

この着色、修正がやり難い。それに大衆は次第に名刺判の小さいのに不満を覚えるようになり、この好みの変化に対応して1866年ころから「キャビネ」版 (cabinet) ( $4 \times 5\frac{1}{2}$  インチ;  $120 \times 164\text{mm}$ ) が流行し始めた。さしもの名刺写真の狂乱もこのころから次第に下火になりかかる。もちろん名刺写真流行の時代でも名のとあった写真家は、有名人の肖像をもっと大判の写真で撮っていた。この時代の有名な肖像写真家としてイギリスで J. E. Mayall, Oliver Sarony (1820-79), Thomas Annan (1829-87), フランスでは Nadar (本名 Gaspard Félix Tournachon) (1820-1910), E. Carjat, A. S. Adam-Salomon (1811-81), アメリカで Mathew Brady (1823-96) などが挙げられる。

これらの中でもっとも華やかな活動をしたのは Nadar であろう<sup>(29)</sup>。彼はもと風刺漫画家でその鋭い人間観察と痛烈な皮肉で知られていた。1852年ころから銀板写真を習い、やがてコロジオン法に変わり、33歳1852年に兄弟と共同でパリに写真館を開いた。彼をパリの人気者にしたのは1858年気球に乗って上空からパリ市街を撮影した冒険であろう。1859年から写真館を Capucine 街 35 番地に移した。ここはオペラ座に近いパリの中心地で、赤く塗った正面とその上に大きく書かれた「NADAR」が人の目を奪った。やがて、ここはパリの進歩的な知識人の集会所となり、Nadar がこのスタジオで撮った第2帝政時代の有名人の優れた肖像写真が多く残ることとなった。芸術家の名前だけでも次のとおりである。音楽家 Berlioz, Liszt, Wagner; 画家 Corot, Delacroix, Manet, Daumier; 作家 Dumas 父子, Hugo, Flaubert, Baudelaire など。

写真は多くの場合大版 ( $180 \times 240\text{mm}$ ) で、もと風刺漫画家としての修練が物を言い、人びとの内面にまで踏み込んだ性格描写が画面に溢れて圧倒的である。幕末の日本からの遣欧使節の多くもこのスタジオに足を運んだ。1874年「印象派」旗揚げのとき Nadar は C. Monet (1840-1926) らにスタジオを1ヵ月貸して応援した。

肖像写真の質から言えば Nadar ほどには個性的でないが、有名と言う点ではアメリカにおける Brady を忘れる訳に行かない<sup>(30)</sup>。

Brady は1841年18歳でニューヨークに出てきて、ここで電信機発明で有名な S. F. Morse (1791-1872) から銀板写真を習った。そして21歳

1844年に自分の写真館「Brady's Dagerrian Miniature」を開いた。

それも場所をニューヨークでも目抜きの Broadway-Fulton 街の角地に選んだ。

彼が撮った A. Lincoln（1809-65）の写真は有名となり、その大統領就任に大きく貢献した。後年 Lincoln は次のように言っている。

「Brady と Cooper ユニオンでの演説が私を合衆国大統領にしたのだ。」

5 ドル紙幣にある Lincoln 肖像は彼が撮影したのである。

Brady は Lincoln が大統領になってからでも Lincoln の写真を撮り続け「Mr. Lincoln's camera man」言われるまでになった。

次第に彼の写真館に有名人が訪れるようになり、また Brady も積極的に有名人を追いかけた。これがまた写真館の評判を高くした。

「Brady が君の写真を撮りたいと言ってきたら、君がニュースになったことを意味する。悪名高いか、面白いか、ただ有名であればいいのだ。

君が善良か、偉大かなどは二の次なのだ。」

1861年7月南北戦争が勃発した。Brady は撮影班を組織して北軍に従軍した。その結果が「Photographic History of the Civil War」10冊本となった。しかし、このときの借財が晩年の Brady を苦しめることになった。1896年1月16日に73歳の Brady がニューヨークで死亡したとき、その持ち物は数えるほどしかなかったと言う。同じような運命は「名刺写真」の創始者 Disdéri にも訪れている。Disdéri が貧困の中1890年71歳でニースの老人ホームで死んだとき、彼は耳は聞こえず目もほとんど見えなかったらしい。

### 3. 「芸術写真」の試み

写真発明が絵画に与えた衝撃は大きかった。

銀板写真年金法案審査委員の1人、歴史画家 P. Delaroche（1797-1856）が叫んだとされる言葉がある<sup>(31)</sup>。

「この日から写真は死んだ。」

ロマン派の旗手 P. Delacroix（1798-1863）は写真を歓迎して言った<sup>(32)</sup>。

「私の生涯のもっと早い時期に写真が発明されていたらどんなにか良かっただろう。」

1851年パリで世界最初の「写真学会」(Société Héliographique)が創設されたとき彼はその創設委員の1人に加わった。Delacroixの死後、彼のスタジオからカロタイプ紙写真を基にした多くの素描が発見された。写真をデッサンの代わりに使った画家は他にも多い。

このアイデアを逆にすると、写真をして「絵画を描かせる」アイデアとなる。すでに写真家は画家が描いた背景のまえに客を立てさせて写真を撮り、さらに勝手に修正を加えている。

それならモデルを選んで扮装をつけさせ、適当な背景の前で写真を撮れば「歴史画」ができると誰もが考える。このころ流行した「活人画」(tableau-vivant)を写真に撮ればよいのである。

この方面の先駆者に William Lake Price (1810-96) がある。Price はもと水彩画家であった。彼の写真作品「Don Quixote in His Study」(1855)<sup>(33)</sup> はアルバート公の賞賛するところとなった。次の年の「A Scene at the Tower」(1856) はさらに劇的な場面を写真で創り出して評判となった。のちリチャード3世となる叔父の陰謀でロンドン塔に幽閉され、刺客の影におびえる兄弟を描いた Delaroche「幼王エドワード5世とその弟デューク公」を模したものである。この歴史画は Delaroche が7月革命のすぐあと1830年パリ「サロン」に出品してイギリスでも評判になっていた。Price のこの「歴史写真」は1856年1月ロンドン「写真学会」写真展に展示された。

ちょうど Lewis Carroll は写真をはじめようかと思案をしていたところで、この写真を見て感銘を受けたと日記に書き残している。

スウェーデン生まれの Oscar Gustave Rejlander (1813-75) も Price と同じように画家であったが、同じ方面を志してもっと世間を騒がせた。始めローマで絵画の修業をし(1852)、写真をデッサン代わりに利用する目的で写真を習った。ロンドンで肖像写真館を開いたのが1855年で、2年後の1857年になってから「人生の岐れ道」(The Two Ways of Life) を制作して一躍有名になった。大版写真(41×79cm)で30枚もの陰画を重ね、焼付けて制作した物である。画面の左側には蠱惑的な裸身の女人群像が描かれ、右側の画面には祭壇に向かって敬虔な祈りを捧げる女性や勤労に励む群像が描かれている。そして中央の青年は「人生の岐れ道」に



迷っている<sup>(34)</sup>。これは Price「ロンドン塔」の単なる歴史画と違って、教訓的寓意を含んだ「合成写真」(composite photograph)である。

感心したヴィクトリア女王は 10 ポンドでこれを買上げ夫君アルバート公に贈った。

Rejlander の合成写真が写真界はもとより美術界にも論議をひき起こしたのは当然である。

「こんな勝手に貼り合わせたものが写真であろうか?」「これが絵画と言えるか?」

Rejlander はこのあとも主題のある「合成写真」の制作を 1859 年まで続けたが、1860 年からは肖像写真屋にもどり絵画も描くようになった。あと Rejlander は Carroll と親しくなり彼の肖像写真も撮っている。また Cameron 夫人にも写真のテクニックを指導した。C. Darwin 晩年の著書「人間と動物の表情」(The Expression of the Emotions of Man and Animals) (1872) の巻頭を飾る挿絵写真を撮ったのは Rejlander である。ここでも彼は相変わらず芝居気を発揮して、感情の表現に一役を買い自分でもモデルを勤めている<sup>(35)</sup>。

次に来る Henry Peach Robinson (1830-1901) ももとは画家であった。1852 年に始めて写真を習い、1857 年から写真館の経営を始めた。彼の最初の作品で、もっとも有名になった合成写真「Fading Away」<sup>(36)</sup> は数枚の陰画を重ねて焼付けたもので、1858 年ロンドン「写真学会」写真展で展示された。少女が死の床についている。右手の枕元には愁いに沈む姉がこれを見つめ、左側ベッドの足元には聖書を手にした祖母らしい老婆が座っている。カーテンの引かれた窓際に立つ男性は、父親であろうか婚約者であろうか、背中だけが写っている。この代表作にみるように Robinson の得意とするのは、合成した構図と情景をして作者が意図した情感を見る人の心に醸し出させるにある。

この傾向は彼の作品「Autumn」(1863)<sup>(37)</sup>、「Dawn and Sunset」(1885)<sup>(38)</sup>にまで継承された。1861 年制作の「The Lady of Shalott」<sup>(39)</sup> はこれらと趣を異にして Alfred Tennyson (1809-92) のアーサー王物語長詩「国王の牧歌」(The Idylles of the King) 第 7 編「Lancelot and Elaine」に題材をとった作品である。円卓の騎士 Lancelot を慕う乙女

Elaine の亡骸は白いバラと白い百合を積んだ小舟に乗せられて Camelot 城の水門に着く。これは歴史画というよりフィクションの世界である。このような作画の傾向は、多くの論文の中で Robinson がその効果を主張した結果、人びとの模倣するところとなった。その影響を受けている箇所が Carroll と Cameron 夫人の作品の中にも数多く指摘できる。Robinson の著書「Pictorial Effect in Photography」(1869), 「Picture Making by Photography」(1884) はよく読まれ、とくに後者は版を重ねて影響するところが大きかったのである。

Robinson 作品に共通する情景と構図には、その当時イギリス絵画界の底流にあった「ラファエル前派」(Pre-Raphaelite Brotherhood) の反映が色濃く見て取れる。たとえば上に説明した Robinson 「The Lady of Shalott」は明らかに、河を流れて行く「ハムレット」Ophelia の亡骸を描いたラファエル前派の旗手 Millais の作品「Ophelia」(1852) の模倣である<sup>(40)</sup>。Carroll も Cameron 夫人もともにこのラファエル前派の画家たちの中に多くの友人に持っていた。そのため彼らの写真にはこれらの画家たちからインスピレーションを吹き込まれて作った作品が多く残っている。

この派の運動は当時画壇に勢力のあった画家 Dante Gabriel Rossetti (1828-82), John Everett Millais (1829-96), William Holman Hunt (1824-1910), Frederic G. Stephens それに彫刻家 Thomas Woolner (1825-92) と Rossetti の弟で詩人の W. M. Rossetti (1828-1919) が加わった7人が、1848年「Brotherhood」を結成したときに始まる。これらの人びとは、もと古典派であったが、古典派の理想とするところが Raphael (1483-1520) およびそれ以後に偏っているのに不満を抱いた。これよりもっと遡って、中世末から初期ルネサンスに見られる古拙ではあるが、深い信仰に根ざした素直で素朴で清純な表現にもどれと言うのが彼らの主張であった。これらの運動は批評家 John Ruskin (1819-1900) が執筆中の「近代画家論」(Modern Painters, 5巻, 1843-60) に影響されるところが少なくなかったに違いない。当然 Ruskin はこれらラファエル前派の運動を擁護した。この派の活動ははじめ芸術界に新鮮な機運を鼓吹するのに成功したが、やがて耽美的、神秘主義的な傾向が目立つようになり次第に支持者を失った。大陸ではフランス「印象派」(1874) が勢力をのばす一

方で、ヨーロッパ全体は後期のラファエル前派よりずっと頹廢的な「世紀末」にのめり込んで行く。ラファエル前派の最盛期は彼らの機関誌「The Germ」と同じように長く続かなかった。

#### 4. Carroll—写真を始めるまで

Lewis Carroll の本名は Charles Lutwidge Dodgson である<sup>(41)</sup>。国教派の牧師 Charles Dodgson を父として 1832 年 1 月 27 日 Cheshire 県 Dar-esbury 村の牧師館で生まれた。母親 Frances Jane Lutwidge と父親は従兄妹同士であった。Carroll の前にはすでに 2 人の姉がおり、あとに 7 人の妹と 1 人の弟が生まれたから、子供だけでも 11 人の大家族である。家族が多くなったので父親がもっと収入の多い勤務先を探した結果、Carroll が 11 歳の 1843 年に Yorkshire 県 Croft 教区に移ることができた。一家は父親が 1868 年に死亡するまでの 25 年間この Croft 牧師館で住んだ。12 歳になった Carroll は 1844 年から 1 年半 Richmond 市にある寄宿学校で勉強した。ここは牧師館から 20km ほど離れていた。1845 年暮れにここを卒業して牧師館にかえり、パブリックスクール Rugby 校への入学準備を始めた。彼は幼いときから、大勢の姉や妹のために遊び道具を自作したり、コミカルな詩や物語を話して喜ばせていたが、このころには手書きの「牧師館雑誌」(The Rectory Magazine) まで編集するようになっていた。Rugby 校に入学したのが 1846 年で 1849 年までの 3 年間この寄宿舎で過ごした。Carroll は子供のときに引いた風邪の後遺症で、耳が遠く吃る癖もあったから、活発な学生にまじってのパブリックスクール生活ではかなりの苦痛を味わったに違いない。しかし彼は内気で人嫌いな面がある一方で意外と、状況次第で人と上手につき合う術を心得ていたから、案外うまく切り抜けたかも知れない。

「牧師館雑誌」は相変わらず手書きであったが、このころから「牧師館の雨傘」(The Rectory Umbrella) と改題されている。これを飾る Carroll の筆になる文章と挿絵には、すでに並なみならぬパロディー的才能が満ち溢れていた<sup>(42)</sup>。

1849 年暮れに Rugby 校寄宿舎から Croft 牧師館に帰ってきた Carroll は翌年 1850 年 5 月までオックスフォード大学入学の準備に追われた。彼

がこの大学の Christ Church 学寮への入学を許可されたのは 1850 年 5 月 23 日 (18 歳) である。ここは父親が学んだと同じ学寮であった。入学の直ぐあとで母親が亡くなった。学寮に居住するようになったのは次の年、1851 年 1 月からで、このあと 1898 年 66 歳で死亡するまでの 47 年間にここで過ごすことになる。大学では神学を始めとして古典、数学などを勉強した。1852 年 12 月 (20 歳) から奨学生 (Pusey's Studentship) に推薦された。もちろん奨学金が出るのであるが、それには独身であることと、将来は聖職 (Holy Orders) に就くことという条件があった。

1854 年 10 月の最終試験は数学で第 1 位であったが、古典人文学 (literae humaniores) では第 3 位にとどまった。それでも優秀な成績である。この結果、この年の暮れ 1854 年 12 月 18 日に文学士号 (Bachelor of Arts) が授与された。1855 年になって Henry George Liddell (1811–98) がパブリックスクール Westminster 校長から Christ Church 学寮長に転任してきた。彼は R. Scott との共著 Liddell–Scott 「Greek–English Lexicon」(1843) で知られた著名な古典学者である。学寮長は Carroll の直属上司で監督官でもある。Liddell 一家は Liddell が 1891 年 80 歳で退職するまでこの学寮長公館 (Deanery) で暮らした。3 人娘の次女 Alice (1852–1932) は 1852 年生まれであるからこのとき 3 歳である。

Carroll の方は 1856 年 1 月から数学講師 (mathematical lecturer) に任命され、この職には 1881 年 10 月に自分から辞職を申し出るまで就いていた。あとあと彼には数学上の著作が多い。「Syllabus of Plane Algebraical Geometry」(1860), 「Formulae of Plane Trigonometry」(1861), 「An Elementary Treatise on Determinants」(1867), 「Euclid and His Modern Rivals」(1879), 「Euclid, Books I and II」(1882), 「Symbolic Logic」(1896)。

これらのほとんどは初等数学の解説書である。Carroll は当時の数学界とは無関係だったから、近代数学に対する貢献は全くと言ってよいほどない。ただ最後の著書「Symbolic Logic」には彼独特の論理的ひらめきが認められる。

数学講師の年俸は 300 ポンドである。これだけの金があれば、なんとかカメラや写真機材を購って趣味の写真が楽しめる。Carroll がこの 1856

年から趣味の写真に手をつけたのは、この金銭上の余裕ができたことにも関係がある。また、このころから雑誌に雑文や詩を寄稿して原稿料を稼ぐようになった。その最初が1853年に創刊されたばかりの雑誌「Comic Times」1855年号への寄稿である。この雑誌は16号で廃刊となり、1856年からは月刊誌「The Trains」となった。Carrollは頼まれて詩を送り、これが第3号に掲載された。このとき編集長Edmund Yatesに変名のアイデアを4種類届けたところ、Yatesが「Lewis Carroll」を選んでくれた。

本名「Lutwidge」をラテン名「Ludovicus」にしてから「Lewis」とし、本名「Charles」をラテン名「Carolus」にしてから「Carroll」に変えたのである。

1857年（25歳）で文学修士（Master of Arts）を授けられ、1861年12月22日には助祭（Dean）に任命された。しかし彼の聖職はこれ以上に上がらず、生涯にわたって司祭（Priest）にはなれなかった。これには内気と吃り癖から、人前で大きな声で説教ができないところに原因があったのであろう。しかし少人数の子供を集め、その前で自作の幻灯機で映写しながら、聖書物語を教えるのは喜んでしたらしい。

## 5. Carroll—1855年9月写真の始め

Carrollはオックスフォード大学文学士になった1854年（22歳）から、死の1年前の1897年（65歳）までの43年間、日記をつけている。しかし残念ながらその中で1858年5月（26歳）から1862年5月（30歳）までの4年間分が残っていない。おそらく近親者が故意に破棄したものと推定されている。

つぎに残った日記からCarrollの写真に関する記入を拾い上げて、彼の写真に対する奇妙とも思える情熱的な打ち込みぶりを追ってみることにしよう。もっともCarrollは子供のときに妹たちに玩具を作ってやった事から分かるように、思い付きがよく手が器用で絵も上手だったから下地はあったのである。

1855年9月Carrollが大学の夏休み「Long Vacation」でCroft牧師館に帰郷していると、そこへ母の弟のSkeffington Lutwidgeがやってきた。この叔父は発明好きで、いままでもCarrollに顕微鏡や望遠鏡を土産

にくれていた。この叔父が今年もってきたのはカメラである。すでに説明しておいたように前年の暮れ 1854 年 12 月「Talbot-Laroche」写真裁判の結果、この年の 2 月からカロタイプ特許が解禁になっていたのである。

叔父はカロタイプを習っていて、Carroll をお供に連れて写真を撮ってみせた。

「1855 年 9 月 8 日：叔父が教会や橋など数枚撮ったが、どれも大して成功とは言えなかった。」

このあと 2 人は Richmond 市まで写真を撮りに出かけた。次の年 1856 年 1 月から数学講師となり手当がつくようになった。すでに写真をやる気になっていた Carroll は、1 月 16 日にロンドンへ「写真学会」写真展を見に行った。ここで例の Price「ロンドン塔の場面」を見て感心した。

「1856 年 1 月 16 日：Lake Price 制作『ロンドン塔の場面』なる大変に美しい歴史写真があった。人物を撮った物である。これは絵画を描く新しく素晴らしい方法である。」

ロンドンに帰ってから叔父に手紙を書いてカメラを手に入れてくれるように頼んだが、3 月 18 日には同じ学寮の友人 Reginald Southey と一緒にロンドンまで出かけ、「Ottewill」カメラ店でレンズ付カメラを買い 15 ポンドを支払った。カメラが到着するのが 5 月 1 日となり、5 月 8 日には注文してあった薬品と器具が届いた。これらが届くのを待ちきれないで、4 月 25 日 Carroll は Southey のカメラを借りて 2 人で学寮長公館前から教会を撮ってみたが失敗であった。こんな腕前では庭先で遊んでいたであろう Alice (4 歳) の写真は撮れそうにない。

しかし 6 月になると腕が上がったのかこれに挑戦した。

「1856 年 6 月 3 日：午前中、学寮長公館で過ごす。子供の写真を撮る。」  
3 女 Edith は生まれたばかりだから、撮ったのは長男 Hary, 長女 Lorina それと次女の Alice だけであっただろう。

この年の夏休みには例年のように Croft 牧師館に帰省したが、今年はカメラ持参である。それからスコットランド湖水地方へ出かけた。すでに説明しておいたようにコロジオン湿板時代のカメラ旅行は大変である。それに Carroll 自身、奇麗好きで几帳面、おまけに整理気違いであったから、荷造りには人一倍に時間を費やしたに違いない。

Carroll 日記の写真に関する記入は毎年、陽光の強くなる5月ころに始まり、夏期休暇が済んで日差しの弱くなる秋に終わっている。このころ Carroll はまだガラス張りのスタジオ（glass house）を持たず、もっぱら戸外で撮影しているからである。記録魔の彼のことであるから、別にメモ程度のものは書いていたのであろうが、日記の中には撮影手法の細かい記載が書かれていない。露出時間についての記載があるのは、ずっとあとの1876年10月28日だけである。

「1876年10月28日：午前中曇っていたのに3枚撮って大成功（小レンズ—絞り大—45秒）」

5年前の1871年10月には学寮の屋上にガラス張りのスタジオが完成していたし、大口径レンズ小型カメラを使ったから、曇った日でも45秒露出で済んだのであろう。写真を始めた1856年ころはカメラも大きくて、ふつう90秒程度の露出を使ったのではないかと推測される。現在残っている Carroll のアルバムに貼ってあるプリントは、引き伸ばしではなく全て密着焼付けのものばかりであり、プリントの大きさは（8×10インチ）から4分の1板（3¼×4¼インチ）まで5段階に分類されるという。1856年最初の試みのころは使いやすさを考えて、2分の1板（4¼×6½インチ）程度のガラス板を使ったのではないかと思われる。

1856年大晦日に次のような抱負を書いてこの年の記入を終えている。

「1856年12月31日：復活祭の休暇までには写真の腕を上げたい。これは私のリクリエーションでぜひ成功させなければならない。」

次の年、1857年4月22日にはロンドンに出かけて「イギリス美術展」（Exhibition of the British Artists）を見ている。また5月26日にオックスフォード大学解剖学者 Acland からの依頼で多種類の魚の骨を撮影した。5月と6月は天気の日が多かったのであろう、盛んに学寮長公館に押し掛けて子供の写真を撮っている。

「1857年6月2日：午前中、学寮長公館で過ごす。Harry は外出していて2人の可愛い娘 Ina（中崎注：長女 Lorina）と Alice が午前中ずっと一緒だった。レンズテストのために私の写真を撮った。キャップを外したのは Ina である。もちろん、彼女ができるのはこれだけであるが。」

6月15日には学寮の学生で素人俳優 Twiss に衣装を着けさせて写真を

撮った。これと魚の骨の写真で注文をとったところ、Twissの写真には25枚の注文があった。写真への出費を補っているのである。Carrollは世間離れした学者の反面で、こんな打算的な面にも抜け目がない。

「不思議の国のアリス」作者の意外な側面である。

7月から8月にかけてこの年も例のようにCroft牧師館に帰省した。そして9月にはスコットランド湖水地方に出かけて、ここで9月28日に桂冠詩人Alfred Tennysonとその夫人、長男Hallam、次男Lionelなどの写真を撮らせてもらうのに成功した。Tennyson一家は夏は例年スコットランドConiston「Tent Lodge」に避暑に来ているのである。

Tennysonの印象をCarrollは次のように書いている<sup>(43)</sup>。

「変な毛むじらの人物。髪、口ひげ、顎ひげは伸び放題で手入れがしてない。それで表情が見えなくなっている。ダブダブのモーニングを着て、灰色フランネル地のチョッキとズボン、それとダラシなく結んだ絹黒ネクタイ。毛髪は黒く、眼も同じ色であろう。眼は鋭くて、じっとしていない。わし鼻で額は高く広い。顔と額は立派で男らしい。始めて会ったときから態度は親切で親しみやすかった。だが話し方にどこか乾いたユーモアがある。」

CarrollがいきなりTennysonを訪問したとは思えない。Carrollは手紙魔で年間2000通ほどの手紙を出すのがふつうであった。平均1日に5通ほどである。これには吃り癖があって、面接を嫌ったのにも原因がある。だから予めTennysonに自己紹介の手紙を書いて了解を求めた上で訪問したに違いない。CarrollもCameron夫人とともに「大物狙い」(lion-hunter)である。それでもCarrollがこのTennysonの写真を撮ったときは、写真を始めてから僅か1年半しか経っていない。相当に大胆と言うべきであろう。

これを裏返しにすると、このころ知識人で趣味に写真を撮る人間が稀であったことを物語るのではなかろうか。素人写真家は珍しがられて歓迎されたのである。またCarrollは自分の撮った有名人の肖像写真を貼ったアルバムを持ち歩いて、これを見せて彼らの機嫌をとり安心させるのを忘れなかった。写真の下には多くの場合、撮った人の自筆署名を依頼した。見かけによらず抜け目のない実地的な男である。悪く勘ぐれば写真を上流社



会へ取り入れるための手段として利用している嫌いもなくはない。

暮れの12月20日に友人 Southey のところへ行った。

「1857年12月20日：Southeyを訪問。主な目的は彼の新しい写真を見るのと、写真展用の私の写真5枚を届けるためである。」

Cameron夫人は写真学会会員になったがCarrollは会員にならなかったから、写真展への出品は会員のSoutheyを介しているのである。

つぎの年、1858年は3月から写真の準備をした。

ところが、旨くいかない。

「1858年3月29日：1日中、写真でつぶした。化学薬品がうまく働かない。」

これは硝酸銀水溶液のことである。コロジオン液を塗ったガラス板を硝酸銀浴に浸けて感光化するのであるが、この段階がもっともデリケートでいつも成功するとは限らない。日本でも写真印刷には比較的最近までコロジオン湿板を使っていた。工場の職工は硝酸銀水溶液のことを「お銀液さま」と呼んで、その調子を「今日はお銀液さまのご機嫌がわるい」「よい」などと呼んでいたそうである<sup>(44)</sup>。旨くいく日とそうでない日とがある。

4月13日にロンドンに出かけて第5回「写真学会」写真展を見た。昨年の暮れにSoutheyに渡したCarrollの作品5枚のうち4枚が展示されていた。主に子供の写真である。

この年、1858年5月から1862年5月にいたる4年間の日記は残っていないのはすでに説明しておいた。しかし残っている手紙などからCarrollが1859年4月にTennysonをWight島Freshwaterの「Farringford」居館に訪ねているのが分かる。W. Woodsworth (1770-1850)の後を襲って桂冠詩人(1850)となったTennyson一家は1853年からこの島に住居を移して住んでいた<sup>(45)</sup>。Cameron一家がこの島で住むようになるのは1860年からである。

1859年10月からイギリス皇太子(Prince of Wales, のちのEdward 7世)がCarrollの住んでいるChrist Church学寮で勉強することになった。Carrollは皇太子の写真を撮影したいと願い出たが許可されなかった。ヴィクトリア時代の階級社会にあってCarroll程度では上流社会に入れてもらえないのである。

次の年、1860 年 12 月 12 日にはヴィクトリア女王と皇太子が他の王族と共にオックスフォード大学を訪問した。

1861 年に印刷した物に小冊子「Photographs」がある。これが Carroll の最初の「印刷された本」ということになっている。これまでに彼が撮影した 159 種の写真の目録で、例のようにプリントの注文をとる目的のパンフレットであろう。

#### 6. Carroll—1862 年 7 月 4 日 Alice「あの黄金の午後」

次の年、1862 年 5 月からの日記は残っている。この 7 月 4 日には「不思議の国のアリス」関連の記入がある。

「1862 年 7 月 4 日：部屋に Atkinson 君が彼の友人だと言う Peters 夫妻を連れてきたので写真を撮った。彼らはあとで私のアルバムを見て、昼食まで部屋にいた。それから博物館へ向かったので、自分と Duckworth 君とは Liddell 3 人姉妹（中崎注：Lorina, Alice, Edith）を連れて河を Godstow まで遡った。その岸でお茶をしてから Ch. Ch.（中崎注：Carroll の居館 Christ Church）に着いたら 8 時 15 分だった。私の部屋で顕微鏡写真のコレクションを見せてから、学寮長公館に子供らを届けたらちょうど 9 時になっていた。」

イギリスは緯度が高いから夏はこの時間でも明るい。

7 ヶ月あとになって Carroll はこの日記の反対側に次のように書き入れをした。

「私のおとぎ話『アリスの地下冒険』（Alice's Adventures Under Ground）を彼女らにして聞かせたのはこのときで、私はあとでこれを手書きにしてアリスに渡した。」

Carroll がここで書いているように、Carroll の手になる挿絵で飾られた手書きの「アリスの地下冒険」は、おそらくこの年の暮れに Alice に贈られた。この最後の 90 枚目の最後の行「happy summer ( ) days」の ( ) の場所には 3 年前の 1859 年に撮った 7 歳の Alice の写真が貼ってあった。この原稿に手を入れ書きかえたのが 1865 年 7 月に刊行された「不思議の国のアリス」（Alice's Adventures in Wonderland）であるのは知られているとおりである。「不思議の国のアリス」では話も 2 倍近く長くな

り、挿絵は人気画家 John Tenniel（1820-1914）が描いた。

「不思議の国のアリス」が有名になったので、1886年 Carroll はすでに結婚して Reginald Hargreaves 夫人となっていた Alice の許可を得て、手書きの「アリスの地下冒険」を亜鉛凸版にして出版した<sup>(46)</sup>。このとき Carroll は Alice の写真を削って、その箇所に「The End」を入れた。

「不思議の国の Alice」序詩の冒頭は「all in the golden afternoon」となっている。ボート遊びの午後は「輝いていた」のである。Carroll は1898年1月14日に死亡した。その3月に Alice が書いた追悼文にも、このボート遊びの日は「the sun was so burning」とある。またボートを漕いだ友人 Robinson Duckworth も同じ3月に書いた回想記の中に「beautiful summer afternoon」と書いている<sup>(47)</sup>。ところがオックスフォード気象台記録によると、Carroll の日記にある1862年7月4日は「cool and rather wet」で、午後2時ごろは雨だったとある。記録魔の Carroll が日付を書き誤ったとは思えない。このあたりの日記は毎日記入されていて、しかも7月4日にはカッコにいれて正しく「Friday」と書いてあると言う。「輝いていた」のは彼らの楽しい思い出だけなのであろうか。

この年の夏休みの終わり9月5日 Carroll はロンドン Richmond 公園の近く East Sheen の Henry Taylor（1800-86）邸を訪問した。Taylor は植民局（Colonial Office）の高官であるが、詩人としても劇詩「Philip van Artevelde」（1834）で知られていた。Woodsworth の死後（1850）彼と2人の詩人が Tennyson と桂冠詩人の席を争ったことがある。

Cameron 夫人と Taylor とはすでに10年来の付き合いで、家も近くにしたいと言うので Cameron 家は1850年から近くの「Sheen Lodge」に住居を移していた。Carroll が Taylor を訪ねたのはおそらく Tennyson からの紹介であろう。Cameron 夫人の名はすでにロンドン社交界で知られていたが彼女はまだ写真始めていない。

Taylor 邸に行ったらそこに Cameron 夫人の次男 Ewen W. Hay がいた。Carroll はここで Julia Jackson 嬢の写真をコピーさせてもらった。Julia は Cameron 夫人の妹 Maria の娘である。Cameron 夫人だけが例外で夫人の姉妹たちは、いずれもその美貌で知られていた。だから妹 Maria も美人で娘 Julia も美しかった。Julia はあとで結婚して Duckworth 夫人

となる。Cameron 夫人が彼女を撮った写真は、その横顔の美しさで有名となり、1970 年ころのオークションで記録的な 1500 ポンドという高値で競り落とされた<sup>(48)</sup>。この Cameron 夫人の姪 Julia はあとで Leslie Stephen (1832-1904) と再婚した。2 人の間の娘が女流作家 Virginia Woolf (1882-1941) である。

次の年、1863 年 Carroll はロンドンへ行って、合成写真で有名になっていた Rejlander 写真館で名刺判肖像写真を撮ってもらった。

「1863 年 3 月 28 日：(撮影が済んでから) 数多くのプリントとネガを見せてもらった。ある物は大変に美しかった。」

Carroll は他人の顔写真は嫌というほど撮らせてもらっているのに、自分は写真を撮られるのを嫌った。Gernsheim によると、それでも 5 回ほど顔写真を撮られているそうである。それらの中で裏に Carroll のペンで「Done by Rejlander」と書き入れのある、この写真 (31 歳) がもっとも良く知られている<sup>(49)</sup>。斜め右を向いたポーズで膝の上においた大きなレンズを布で拭いている。少しはにかんで、かすかに微笑しているやや神経質な横顔には学寮「Tom Quad」で有名な変人 (eccentric) の面影はない。それに、よく言われている外貌の左右非対称がこの写真には見えない<sup>(50)</sup>。

「Carroll は見たところハンサムであるが、左右が不揃い (asymmetric) であった。鏡の反射に対する彼の興味は、どうやらこれから来ているらしい。一方が他方より高い肩、少し歪んだ微笑、同じ高さにない青い両眼。背丈は中くらいで痩せている。ピンと背を伸ばして歩くが、足取りは奇妙にギゴチない。一方の耳が聞こえず、吃音で上唇がピクピクと震えた。」

この年の夏期休暇の終わりにまたロンドンに出かけて、ラファエル前派の創始者 Rossetti や Tom Taylor (1817-80) を訪問し、9 月 29 日から 2 週間ほどこれらの家族の写真を撮りまくった。Taylor はあとで 1874 年から 80 年にかけて風刺週刊誌「Punch」の編集長をした。Carroll がどのようにしてこの両家に取り入れたのか定かではないが、Rossetti 家では歓迎されて庭へ降りる手すりのある階段が背景に好適だと言うので、ここで Rossetti 一家の写真を多く撮らせてもらった。また他の人をここに連れてきて、写真を撮らせてもらったことも多い。

Cameron 夫人も有名人 Rossetti の写真を撮らせてもらおうと運動したが、これに対する Rossetti の反応は冷たかった。おそらく Cameron 夫人の粗野とも言える、例の押し付けがましさに反発したのであろう。これと反対に Carroll の女性的でオズオズした様子が、まず婦人連に好意的に受け取られ、これが主人たちの態度に影響している。これは Tennyson 家でも同じであった。「将を射んとすれば馬を射よ」である。

この年の秋学期からデンマーク皇太子（のちの Frederick 8 世, 1843-1912）が Christ Church 学寮で勉強することになった。撮影を申し込んだところ許可されて 11 月 18 日になって撮影できた。このころはまだ自分のスタジオがないから、カーペット商 Badcock の一室を借りてスタジオにした。デンマーク皇太子はその美貌と優雅な振舞いで聞こえたイギリス皇太子妃 Alexandra (1844-1925) の弟である。Carroll の知合い George William Kitchin 司祭の妻が Alexandra 妃の幼友達だった縁で許されたのであろう。Kitchin の娘 Alexandra (Xie) も美しい子で、Carroll はこの子にシナ人の衣装を着せたりして多くの写真を撮っている。この子の名前 Alexandra は名付親になってもらった Alexandra 妃の名前をもらったのである。

## 7. Carroll—1864 年 7 月 Cameron 夫人との出会い

次の年、1864 年 6 月 23 日にロンドンで「写真学会」写真展を見た。そこには Cameron 夫人の作品も展示されていた。

「1864 年 6 月 23 日：写真展へ出かける。作品の数は少なくつまらないものだ。Cameron 夫人の焦点ボケの (taken out of focus) 大きな顔写真 (large head) はいただけない。」

Cameron 夫人は 7 ヶ月まえの 1863 年暮れに、娘夫妻からカメラを贈られて写真を始めたばかりである。そして今年の 1 月になってから 8 歳の Annie Philpot をモデルにして成功した。「Annie, My First Success」である。それが 2 月 22 日になると最初の写真アルバムを Watts に贈るほどに進歩した。そこに貼られた 39 枚の写真はすべてクローズアップ肖像写真で、中には Annie「最初の成功」、Tennyson の長男と次男、Henry Taylor などの写真が貼られていた。Cameron 夫人は 5 月にロンドン「写

真学会」に入会し、数点を選んで写真展に出品した。

Carroll が見たのがこれである。

大方の批評は作品の仕上げが汚いのと、焦点ボケなど技術面の欠点を指摘して不評であった。しかし中には「Photographic Notes」のように、型破りを褒めてくれるのもあった<sup>(51)</sup>。

「表現は力強く賞賛に値する。しかし従来の写真の慣習と伝統とは全く相容れず、あるいはそれだからこそ価値あると言うべきだろう。」

Carroll はすでに Cameron 夫人に手紙を書いて、画家 Watts を紹介してくれるように頼んでいた。Carroll が Watts に会いたがったにのは訳がある。ちょうど写真を始めた 1856 年、ロンドン「Princess」劇場でまだ 10 歳だった娘役 Ellen Terry (1847-1928) の演技を見て感心して、ぜひ彼女の写真を撮りたいと願っていた。

その Terry (16 歳) が昨年 2 月画家 Watts と結婚したのである。

Cameron 夫人からの紹介状がもらえず、結局画家 Valentine (Val) Prinsep が Watts を紹介してくれた。Val の母親 Sarah は Cameron 夫人のすぐ下の妹で、外務省の高官 Thoby Prinsep (1792-1878) と結婚して羽振りがよかった。彼らは住んでいた「Little Holland House」居館を根城にして、ロンドンでも指折りのサロンを主宰していた。サロンは美貌で聞こえた Sarah が取り仕切り、ここに多くの有名人が参集して盛会であった。Watts 夫妻もここに住んでいる。Watts は 1851 年に 3 日間のつもりでここに滞在したが、すっかり気に入って 30 年近くもここで暮らすことになった。

Carroll は Watts の家で Cameron 夫人の撮った Terry の写真を見せられたが、このときは Terry に会えなかった。彼女と会うのは次の年の 4 月となり、7 月になってやっと写真を撮らせてもらうのに成功した。

ロンドンで Terry と会えなかった Carroll は、Cameron 夫人に会うため Wight 島 Freshwater に向かった。「Plumbly」ホテルに宿を取ったが、ここでもすぐに社交ぶりを発揮した。

「1864 年 7 月 27 日：この家で Holder 大佐とか言う人の写真道具を見た。それで『ご同輩』(one of fraternity) のよしみで近づきになりたいと名刺を送った。彼は大変に親切で、紙挟みに入った写真(すべて風景)

を貸してくれたので、これを拝見した。」

次の日、7月28日にCameron邸へ行った。

「1864年7月28日：私の写真をHolder大佐に見てもらうのに庭に出た。大佐の可愛い娘がいた。彼はこの子の写真を撮ったことがないと言うのだ！Cameron夫人を訪問。夕方に私の写真を持ってきて欲しいと言われたので9時にお邪魔した。2人の息子とLindsay Neale氏がいた。ご主人Cameron氏は気分が悪いということだった。夫人は自分の写真を見せてくれた。中には大変に素晴らしいのもあった。」

Carrollは「可愛い娘」が好きで、なんとか機会を見つけて彼女たちの写真を撮った。

「私は子供が好きだ。男の子以外はね。男の子は私にとって魅力のある人種ではないのだ。」「全ての子供にベタ惚れだと思っているようだが、私は豚のようになんでもパクつくのではない。つまんで選ぶのだ。」

この性癖は「不思議の国のアリス」の象徴分析とともに精神分析者の好餌食となっている。

Cameron邸へ招待されたのは8月2日になってからである。

「1864年8月2日：夕方にCameron邸を訪問してHenry Taylor氏とFranklin夫人とに会う（夫人の娘は学芸会で見かけた子で、Cameron夫人にその子の写真を撮ってもらうつもりで、まえに名前を聞いておいたのだ）。」

本当は日記の書いているようには、スラスラと事は運ばなかった。この様子は次の日、8月3日に妹へ書いた手紙から分かる<sup>(52)</sup>。

「Louisa様：7月28日付Mary宛の手紙の続きです。この手紙には28日のお昼までの様子が書いてあったと思います。夕方にCameronさんのところに写真を持ってくるように頼まれました。喫茶室である紳士とその夫人（私の得意の人相学の教えるところによると真の紳士淑女です）と話をし写真を見せました。このご夫人は芸術家で大変に興味を持ってくれました。写真に理解のある人に写真を見せるのは嬉しいものです。次の朝にもこのご夫婦と合いました。彼らは帰るようでロンドン市St. James テラスのBoyes夫妻と言うことでした。おたがいに気が合い、オックスフォードのことから『ロンドンに来られたら寄って下さ

い』と言われました。このように私は『すぐに』友達をつくる才能があるのに気が付きかけています。夕方（中崎注：1864年8月2日）になって私は Cameron 夫人とおたがいの写真を見せ合いました。彼女のはどれもワザと（purposely）焦点ボケに撮っており、ある物は大変に生きいきしていましたが、中にはヒドイのもありました。それでも Cameron 夫人はまるで芸術上の勝利のように言いました。彼女は私の作品のある物を焦点ボケにしたほうがよいと言いましたが、私の方では彼女の作品のある物は焦点を合わせた方がよいのにと思いました。

次の2-3日は大変に楽しかったのですが出来事はありませんでした。月曜日に（中崎注：8月1日）Cameron 夫人と会って、ここには可愛い子供が多いからカメラを取り寄せようかと思っていると告げました。しかし、それは煩わしいのでこの子らの中でもっとも可愛い2人の写真を、私の代わりに（ピントを合わせて）撮ってくれるように頼みました。1人は Marlborough 市長 Bradley 氏の子供さんで、もう1人の名前は知りませんがよく見かける子でした。私は夫人にできるだけ詳しくその特徴を告げました。返事はこうです『それじゃあ、今度見たとき名前を聞けばいいじゃないの。』私は半分その気になりました。夫人は火曜日（中崎注：8月2日）の晩に来て、Henry Taylor 氏に会うように言いました。彼は Bournemouth から来ることになっているのです。

月曜日に海岸をブラブラしていたら例の子に会いました。少し浅黒い黒い目のジプシー風のとても美しい子です。もし名前を聞いたら怯えるかも知れないと思って、ホテルに帰ってから女主人に崖のところまで来るように頼みました。彼女がこの子が誰だか教えてくれたのです。この島の要塞司令官の子供でした。火曜日の夕方に Cameron 邸を訪ねました。Cameron 氏と Taylor 氏はまだ居間におらず、Cameron 夫人とある婦人だけがいて、夫人が例のモガモガの調子で紹介してくれましたが、ご婦人の名前の綴りは聞き取れませんでした。別に気にも止めませんでした。すこし話をしてから私は言いました『例の写真を撮るように頼んだ少女が誰だか分かりました。ホテルの女主人に聞いたのです。あれは Frankland 大佐の子供さんでしたよ。』すると Cameron 夫人はご婦人を指さして静かに言うのです『このご婦人のお子さんですよ。』奇



妙な偶然でしょう（Cameron 夫人の表現では『とても面白い偶然』）。Franklin 夫人（私は違う名前に聞いていたのです）は自分の子供の写真を撮りたいと言う私の希望で気を悪くした様子は全くありませんでした。この晩に写真を見てもらったのですが、Taylor 氏が彼女に歌を唄って欲しいと頼んだので、見てもらう時間がありませんでした。それで私は残りを彼女の家（ごく近所なのです）で見せようと約束しました。今朝（中崎注：8月3日）その約束を果たしたところです。写真を夫人と娘の Rosa と3人の男の子（すこし醜い）に見せました。夫人は大変に明るく親切な人で、私のカメラが届いたら Rosa と Bradley 氏の子供さんの写真を撮らせようと約束してくれました。」

この手紙で Carroll は「このように私は『すぐに』（on the shortest notice）友達を作る才能があるのに気が付きかけています」と言う。いままで引っ込み思案であった彼が、写真を撮らせてもらうために有名人を積極的に追いかけるようになり、次第に自分の交際能力を自覚し始めているのである。もちろん素人には珍しい写真が撮れると言う技術を武器として使っているのである。

8月2日夕方の訪問では Cameron 夫人と写真を見せ合った。そして彼女の写真はワザと（purposely）焦点をボカシていると批評している。あとで説明するように、Cameron 作品の焦点ボケはいろんな要因が重なった結果で必ずしも「ワザと」ではない。反対に Cameron 夫人は Carroll に向かって彼の作品は少し焦点ボケにしたほうが良いと忠告した。彼のことから面と向かって反論をしなかったろうが、Carroll は Cameron 夫人の作品こそ焦点を合わせたほうが良くなるのにと思っている。

写真では Carroll の方が先輩である。Cameron 夫人の僅か半年ほどの経験に比べて、Carroll の方は8年も前から写真を撮っている。その先輩に向かって自分の作品を「まるで芸術上の勝利のように」誇るのである。

2人の性格は正反対だから話が合うはずがない。

Carroll の作品はその性格を反映して、少女たちの愛らしい表情、姿態を柔らかな雰囲気の中に写し取るのに成功している。それらは全身や群像が多く、全て巧みな構図のなかに調和的に収まっている。一方 Cameron 夫人はその強烈な個性にふさわしく、性格的な大人の胸から上のクローズ

アップを撮り、精神の内面までに踏み込んで主人公を印象的な画面に写し撮るのに成功している。

妹 Luisa への手紙の最後に「私のカメラが届いたら」とあるように、Carroll はロンドンに残してあった写真道具を取り寄せた。これが8月12日に着いたので、これを Tennyson 「Farringford」 居館に持って行って、Annie や例の Franklin 家の可愛い娘 Rosa の写真などを撮った。Carroll がロンドンに向かって Freshwater を発ったのが8月19日だから、この夏休みは Freshwater に3週間ほど滞在したことになる。このあと Carroll と Cameron 夫人は生涯に2-3回会う機会があった。

8月20日ロンドンに到着、すぐに Terry 家を訪問した。Ellen には会えなかったようで、母親に10月にまた来るから、そのとき写真を撮らせてくれるように依頼してオックスフォードへ帰った。約束どお10月に訪れてみると、すでに冬の光線が弱くて写真は来年まわしとなった。

次の年、1865年4月7日に Ellen の実家 Terry 家を訪ねた。Terry 家は冬の間に新しい家に移っていた。このときも Ellen の写真が撮れず、夏にまた来ることにした。こうして実際に写真が撮れたのは夏休みの7月13日になった。このとき Ellen の妹たち、Marion (Polly), Florence Maud (Flo) の写真も撮った。

「1865年7月13日：馬車にカメラを積んで Terry 家を訪問。男兄弟2人以外は全家族が在宅。雨が強くこの日は3枚しか撮れなかった。

Polly, Watts 夫人 (Ellen) の半身像, Watts 夫人と Flo。」

彼女たち3人姉妹はともに優れた女優として知られていた。このあと Carroll は Terry 一家と親しくなり Ellen との交際は彼女が Watts と離婚 (1877) してからも続いた。これは珍しいことである。

Carroll は自分と女友達との関係について言っている。

「思うに私と少女の友情は、10のうち9まで『小川が河と交わる』ころに難破してしまう。そして、あんなにも親しかった女友達が、二度と見たくもない関係に冷えてしまうのだ。」

Ellen との交際が長く続いたのは Carroll が芝居好きだったのにもよるが、彼女が演劇の才能以外に Carroll と対等につき合えるほどの知性の持ち主だったからであろう。

Terry 家で写真を撮ったあと 7 月 18 日に画家 Millais を訪問して Millais 一家の写真を撮った。これが 21 日まで続く。Millais は例の名作「Ophelia」（1852）で名を揚げ、このころは肖像画に転じ金を稼いでいた。

Millais の妻は Ruskin と離婚した Effie である。

こんなで 1865 年夏は写真に忙しい年であったが、「不思議の国アリス」が刊行された記念すべき夏でもあった。写真を通じて知合いになった小説家 George MacDonald（1824-1905）の子供たちに、手書きの「アリスの地下冒険」を見せたところ、子供たちが夢中になりぜひ出版して欲しいと懇願した。2 年ほどかかって原稿を書き、これを人気挿絵画家 Tenniel の挿絵をつけると言う条件で Macmillan 書店から出版することとなった。Tenniel の挿絵は Carroll の下書きを参考にしたが、主人公「アリス」のモデルには本物の Alice でなく彼女に全く似てない Mary Hilton Badcock を使った。

細かい点に煩い Carroll は Tenniel と意見が合わず衝突を繰り返したが、やっとこの年、1865 年 7 月 4 日に 2000 部刊行の運びとなった。7 月 4 日は 3 年前の「あの金色の午後」の日である。印刷ができたが挿絵の印刷が気に入らないと言うので、刷りなおしたから本当の出版は 11 月にずれ込んだ。しかも本の奥付は 1866 年印刷となっている<sup>(41)</sup>。

この作品により Carroll は 33 歳にして始めてナンセンス作家としての名声を獲得した。Christ Church 学寮の学生や同僚たちは苦笑いと共に拍手喝采した。Cameron 夫人も評判に引かれて読んだに違いない。しかし軽妙なシャレ、ひと捻りもふた捻りもしたパロディーなどは彼女の好みに合わない。昨年のことを思い出して苦い顔をしたことであろう。

「不思議の国のアリス」は Carroll にとって「打ち出の小槌」となった。見たところパッとしない数学講師 Dodgson では誰も注意を払わない。

しかし「不思議の国のアリス」の著者 Lewis Carroll の名前は誰も知っている。夏休み保養地の海岸で写真を撮りたい可愛い女の子がいたら、その子に「From the Author」と書いたアリスの本を渡せばよい。

子供は喜ぶし、母親は安心して写真を撮らせてくれるだろう。ロンドンの劇場でも同じである。

## 8. Cameron 夫人—1848 年イギリス帰国まで

Cameron 夫人の母方の系統はフランス貴族である。祖父 Antoine A. P. de l'Étang (1757–1840) はルイ 16 世王妃 Marie Antoinette の侍臣であったが、フランス革命の始まる 2 年前の 1787 年インドに左遷された。これが彼の命を助けたのである。インドで同じように王妃 Antoinette の侍女であった Thérésé J. B. de Grincourt と知合い次の年 1788 年に結婚した。Thérésé はその美貌で知られていた。2 人の間に 3 人の娘と 2 人の男子が生まれた。その娘の 1 人 Adeline が Cameron 夫人の母である。インドで育った Adeline は 1811 年に東インド会社の高級社員 James Pattle (1775–1845) と結婚した。Pattle はスコットランド人で大酒飲みであったが、35 年間東インド会社に勤務する間に大きな財産を築いた。Pattle 家は女 9 人、男 1 人の子持ちとなった。Adeline, James, Eliza, Julia Margaret, Sarah, Maria, Louisa, Virginia, Harriet, Sophia である。長男の James と女 2 人 Eliza, Harriet が早死にしたから 7 人娘が残った。いずれも祖母 Grincourt 夫人と母親 Adeline に似て美貌であったが、Cameron 夫人になる Julia だけがそれほど美しくなかった。

これが彼女の性格に与えた影響は無視できないであろう。

Julia は 1815 年 6 月 11 日にカルカッタで生まれた<sup>(53)</sup>。ワーテルロー会戦の 1 週間前である。7 人の娘は全てパリの祖母 Grincourt 夫人のもとで教育され、あとイギリスに送ってそこで母国語に馴れさせた。Julia は 1834 年、19 歳で父母のいるカルカッタに帰ったが、1836 年から病氣療養のため気候のよい喜望峰に保養に出かけた。ここで天文学者 John Herschel と知合いになった。Herschel 一家は南天観測のために 1834 年 1 月から 1838 年 5 月までここに滞在していたのである。Julia がいたころ Beagle 号に乗った生物学者 Charles Darwin (1809–82) も Herschel 家を訪問している。Julia は喜望峰滞在中に Charles Hay Cameron (1795–1880) と出会った。

Cameron 家もイギリス上流階級の家柄で Cameron が生まれたとき父はマルタ島領事であった。Cameron はパブリックスクール Eaton 校を卒業後、オックスフォード大学で法律を学んだ。あとロンドン「Lincoln's Inn」法律事務所で弁護士修業をしたが、結局この方面には進まずインド

でイギリス政府の司法関係の仕事をした。あとインド教育制度の改良に力を注いだ<sup>(54)</sup>。

Julia と Cameron が結婚したのが 1838 年で、このとき Julia は 23 歳、夫の Cameron は 43 歳であった。20 歳もの年齢の差のうえに後妻である。こんな関係からか家庭では夫人が支配的で夫はほとんど逆らうことがなかった。古典文学を愛好する学者肌の Cameron は「哲学的」諦念から年下の妻のすることに寛容であった。

Julia の美人姉妹の嫁ぎ先については、すでに Sarah (Prinsep 夫人)、Maria (Virginia Woolf の祖母) で説明しておいたが、そのほかの姉妹たちもすべて貴族階級か上流階級と結婚している。彼女らの美貌、フランス仕込の優雅さ、Pattle 家の富が物を言っているのである。

Julia の結婚 2 年後に祖父 de l'Étang がカルカッタで死亡した。好運にもフランス革命の嵐に会わなかった彼も 83 歳になっていた。そして 5 年後の 1845 年に父 Pattle が死亡した。母国イギリスで葬ってくれと言う希望で亡骸を船でイギリスに運んだ。このとき付き添った母も航海中に死亡した。Cameron 夫人は 30 歳になっていた。

Cameron 家も多産系で子どもが 6 人生まれた。しかし、ここでは男子が多くて、女子は長女の Julia だけである。5 人の男子は Eugene Hay, Ewen W. Hay, Hardinge Hay, Charles Hay, Henry Herschel Hay である。男子の名に「Hay」が付くのは父方の祖母の名が Margaret Hay だったからである。末の子は「Hay」の前に「Herschel」が付いている。これは名付親 John Herschel の名前をもらったのである。

1839 年に生まれた長女 Julia は 1859 年 Charles Lloyd Norman と結婚したが、14 年後の 1873 年に 6 人の子どもを残して亡くなった。母親 Cameron 夫人はこの若くして死んだ長女を偲んで、次の年に「私のガラスの家の記録」(Annals of My Glass House) (以下に「ガラスの家の記録」と略す。翻訳：付録) を書いた。Cameron 夫人が写真を始めたのは 1863 年暮れに、この長女夫妻が写真道具一式を贈ってくれたのが切っ掛けになっている。

男子は長男 Eugene Hay が軍人になった以外は、全て成人後セイロン島に住み、ここで父親の事業を引き継いでコーヒー栽培農園の経営に従事し

た。末っ子の Henry Herschel Hay だけは、あとでロンドンに移住しここで肖像写真館を開いた。

Cameron 夫人は 1848 年 (33 歳) イギリスに帰るまでの 10 年間、夫の勤務先のカルカッタで暮らした。ここで夫人はその強い性格と機知に富んだ会話でイギリス人社交界を牛耳った。Pattle 家の「変人ぶり」(eccentric) は、すでにインドに住むイギリス人社会で有名で、人類を分類すると「男、女、それに Pattle 一家」と陰で言われたそうである。

後年の Cameron 夫人に見られる押し付けがましさを、ある種の傲慢な態度は一面で彼女の生命力エネルギーの現れかも知れないが、植民地インドで暮らす間に知らず知らずに身につけた被征服民族に対する優越感の持ち越しでもあろう。

彼女が結婚した次の年、1839 年は写真発表「騒動」の年で、Daguerre「銀板写真」Talbot「光写生」が発表されて全ヨーロッパはその話題で持ちきった。Herschel も参加して活躍している。「ハイポ」定着は彼の発見である<sup>(9)</sup>。これらの話題はロンドンから Herschel が知らせてくれた。

「ガラスの家の記録」の中に次のようにある。

「彼 (中崎注: John Herschel) は私にとって『恩師』で『尊師』でした。私はずっと子供の時から彼を愛し尊敬しておりました。そして 31 年の交際のすえに彼の写真を撮り国民に示すという重大な責務が私に課せられたのです。まだ写真が Talbot-type や『autotype』(中崎注: ダゲレオタイプの誤り) の幼児期にあったときから彼は私に手紙をくれました。そのころカルカッタに住んでおりまして、未開の土地へ向けての科学的発見の報は、まるで飢えた人間の乾いた唇への水のようにでした。率直に表明された友情から受ける喜びは言うまでもありません。」

インド滞在の終わりのころ Cameron 夫人の知的エネルギーはドイツ詩の翻訳出版に向けられた。有名なドイツ詩人 G. A. Bürger (1747-84) 長編譚詩「Leonore」(1773) の翻訳である。このローマン的な物語詩は当時の人びとの嗜好に合っていたと見えて、イギリスでは Cameron 夫人の前にすでに詩人 Walter Scott (1771-1832) や Herschel の翻訳まで発表されていたから、まだ無名の Cameron 夫人の試みは大胆で無謀とも思えた。

本は帰国の 1 年前、1847 年ロンドンで出版された。

### 9. Cameron 夫人— 1863 年写真開始まで

イギリスに帰った Cameron 一家は数年間 Tunbridge Wells で暮らした。ロンドン南方 40km の小さな町である。ここで、あるとき偶然 Henry Taylor と出会って「まるで短剣が胸に突き刺さった」ような感動に襲われた。Taylor 一家は毎年近くの Ephraim Common に家を借りて夏はここで過ごしていた。Taylor はこのとき 48 歳の男盛りである。Cameron 夫人は強いものに憧れている。だから、このときの感情は恋愛より憧憬に近いものだったのかも知れない。何事にも夢中になる Cameron 夫人の事だから、このあとが大変で Taylor を手紙と贈物攻めにした。占有欲が強いのである。Cameron 夫人は Carroll に負けないほどの手紙魔で、友人に出す手紙が 1 ヶ月に 300 通であったと言う。平均 1 日 10 通である。それも長いものが多く、ふつうで 10 枚を越した。Taylor には毎日手紙を書いた。例の押し付けがましい、あつかましきさである。これには Taylor はもちろん Taylor 夫人も困惑したのは想像に難くない。もともと親切で悪気はないのだが、受ける他人の迷惑を考えてみる余裕がないのである。

これには Cameron 夫人のまわりにいる人びとの誰もが悩まされた。

あとで知合いになる大 Tennyson にしてそうであった。

Taylor に対する激情は幸いにもやがて収まり、彼らの間の友情はこれから 25 年間も続くこととなった。

1850 年 11 月 Tennyson が Taylor ら競争者をおさえて桂冠詩人に選ばれた。この年 Cameron 夫人はもっと Taylor 家に近いところで住みたいと言うのでロンドン Richmond 公園の近く East Sheen 「Sheen Lodge」館へ引っ越した。ここに 4 年いて 1854 年から近所の Putney Heath 「Ashburton Cottage」館へ移った。どこへいても彼女は多くの友人を自宅に招いた。招かれる人びとは妹 Sarah Prinsep 「Little Holland House」サロンの常連と重なった。文化人だけを挙げても次のようである。Herschel 卿、小説家 W. H. Thackeray (1811-63), 詩人 Tennyson, 画家 G. F. Watts, 彫刻家 T. Woolner, 政治家 Henry Taylor, 詩人 Thomas Carlyle (1795-1881), 画家 D. G. Rossetti, 画家 J. Millais, 評論家 John Ruskin, 詩人 R. Browning (1812-89)。

すべてヴィクトリア時代を代表する当代きっての人物ばかりである。

Carroll が写真を始めた 1856 年に Tennyson は Wight 島 Freshwater に居館「Farringford」を購入した。1859 年 Tennyson のアーサー王物語長詩「Idylls of the King」(国王の牧歌)の最初の 4 編が出版された。

この年には Cameron 夫人の夫が長男を連れてセイロン島 Dimbula 溪谷に行き、ここに 1 年ほど滞在した。Cameron 氏は前からセイロン島でコーヒー園を経営していた。この年は長女 Julia が結婚した年でもある。

留守を守る Cameron 夫人は大勢の家族を抱えて Putney Heath の家で暮らしたが、夏の数週間だけは Wight 島 Tennyson 「Farringford」居館で過ごした。ここに滞在中「Farringford」邸に近いところに 2 軒並んだ 2 階建の家を見つけて購入した。あいだに塔を建てて 2 軒を接続し、セイロン島 Dimbula 溪谷の名前を取ってこの家を「Dimbola」と名付けた<sup>(55)</sup>。

ロンドンからここに移転するのは、夫たちがセイロン島から帰った 1860 年となった。家が広いから夏には Henry Taylor などのお客を招待し、右側の家は人に貸したりした。

Cameron 夫人のようなエネルギー過剰の「変人」が近所に引っ越してきたのであるから、Tennyson と Tennyson 夫人は変化ができて喜んだと同時に、迷惑を蒙ったに違いない。ガラガラ声で走りまわり身なりを構わない。これは子供のときから同じで、パリで子供のときの Cameron 夫人を覚えている Thackeray が「ちっとも変わっていない」と感想を漏らしたそうである。やがて Freshwater では彼女の言葉が「法律」(law) となって、人びとはこれに従わされた。Tennyson 家も例外ではない。

島で天然痘が流行したとき Tennyson が種痘を嫌がって書斎に立てこもった。Cameron 夫人は階段の下から叫んだ。

「あんたは卑怯者よ。Alfred。卑怯者よ。」<sup>(56)</sup>

数人のお手伝いはいるが、子供が増えたので世話が大変である。結婚した Julia を除いても男の子が 5 人いる。それに親類 Wilson 家の孤児 3 人を引き取った上に、姉 Adeline の娘が残した子ども 2 人も引き受けた。この上に「乞食の子」Mary Ryan まで引き取って自分の子どもと同じように育てた。Mary は成長してから Cameron 家のメイドとなった。Cameron 夫人がまだロンドン Putney Heath に住んでいたころ、この子連れられたアイルランド女乞食に物乞いされた。おそらく Mary はこのころから



綺麗な子どもだったのであろう、Cameron 夫人は2人を引き取り母親には仕事を見つけてやって、Mary は家族と一緒に育てることにした。いかにも Cameron 的である。美しく成人した Mary をモデルにして Cameron 夫人は多くの写真を撮ることになる。この子の運命はさらに Cameron 的な展開をする。Mary は伶俐な子で読書を好んだ。Henry Taylor は「本が好きなメイドなど碌なことはない」と否定的であったが、この子があとで Henry Cotton 卿夫人になろうとは誰が予想できたであろう。

1863年暮れの12月24日に作家 Thackeray が急死した。あとに残された娘2人を Cameron 夫人が引き取ったのでまた家族が増えた。子どもだけでも13人である。この年 Cameron 氏が2人の息子連れてまたセイロン島に出張した。このころセイロン島コーヒー園は木の成長が悪くて経営困難に陥っていたのであった。さすがの Cameron 夫人も大家族を抱え、おまけにセイロン島からの悪い知らせに神経が参ってしまったらしい。眠れなくなってしまった。心配した長女夫婦が来てくれた。彼女らが島を後にするときカメラ（9×11インチ版）を贈ってくれた。これで母親の気持ちを紛らわせ、その悲しみのエネルギーを新しい趣味で発散させようという願いであった。「ガラスの家の記録」には次のようにある。

「こんな訳で私は努めて感情に流されるのを抑えて、私の初めての（中崎注：カメラと）レンズについて次のように言うにとどめましょう。これは私の今は亡き最愛の娘とその夫がこんな言葉と共に贈ってくれた物です。『お母さん。Freshwater で寂しいときは、写真でも撮って遊んでみたら。』」

#### 10. Cameron 夫人—1864年1月「私の最初の成功」

現実からの逃避という契機によるものにせよ、Cameron 夫人は48歳になって始めて、その全霊を打ち込める対象を発見した。写真による「美」の創造である。「ガラスの家の記録」では次のように言う。

「私があんなにも愛した人たちからのこの贈物は、私の心の奥に秘めた美への憧れを次第に強く揺り動かし、始めから私はこのレンズを優しい熱情をこめてあつかいました。それでレンズはまるで、物を言い記憶をもち創造力に溢れた生き物のようになりました。」

写真についてはすでに Herschel との会話や手紙による聞き合わせで少しは知っていたのであろう。また妹 Virginia の嫁ぎ先 Somers 卿は素人写真家で、ロンドン写真学会副会長を勤めたぐらいであったから、彼からも教えてもらったのかも知れない。しかし始めは全く暗中模索であった。美への憧れは大きいが技術がついて行かない。

「私は私の前に現れる美しいもの全てを捕らえようと熱望し、その思いはとうとう叶えられたのでした。それは困難であるだけ余計に追求する価値があったのです。始め写真術など全く知りませんでした。私はカメラ (dark box) をどこに据えればよいのか、モデルにどう焦点を合わせるのかを知りませんでした。なんとまあ、初めての写真は私がガラス板の薄いフィルム面を手で持ったので消えてしまったのです。」

始めて写真を撮る人は、動かない対象である風景を撮るのから始めるのがふつうであるが、Cameron 夫人が対象に選んだのは始めから人物であった。Wight 島の農民 Rice に1時間、半クラウンのモデル代を払って座ってもらった。やっと写真らしい物がなんとか撮れたが、乾燥するとき湿ったコロジオン膜を掴んで駄目にしてしまった。そのうちに採光を加減する目的で、ガラス張りの鶏小屋をスタジオ (glass house) に改造し、また石炭小屋を暗室にした。

「私は石炭小屋を暗室に変え、息子たちに与えていたガラス張りの鶏小屋をスタジオ (glass house) にしてしまったのです！」

鶏たちは放されました。食べられはしなかったと希望し信じておりますが。生みたて卵を集める息子たちへのお小遣いはなくなりましたが、家族のみんなは私の新しい仕事に協力してくれました。それは鶏や雛との付き合いが、詩人、先覚者、画家、美しい娘さんたちとの付き合いに変わったからです。」

そして年が明けた 1864 年 1 月になって始めて成功した。

「Annie, My First Success」である。Cameron 夫人によると Wight 島では男女ともに美しい顔をしていてモデルに困ることはなかった。このとき Annie Pilpot は 8 歳であった。

「この農夫で成功したので、今度は 2 人の子供を撮りました。私の息子 Hardinge がオックスフォード大学の休暇で帰ってきて、難しい焦点合

わせを手伝ってくれました。見事な写真になるはずの撮影中に、子供の1人が吹き出して写真を駄目にしてしまいました。それで次からは欲張らずに女の子を1人だけにして、もし動いたらかわいそうな Cameron 夫人の薬品や努力が水の泡になるのだよと、彼女の同情に訴えました。この訴えが功を奏して『私の最初の成功』（My First Success）と呼んだ1枚の写真ができたのです。私は喜びに有頂天となり、家中を駆け回ってこの子への贈物を探しました。まるでこの子が1人で写真を撮ってくれたように思えたのでした。私はこれを焼付け、金調色し、定着してから枠に入れてその日のうちに女の子の父親に贈りました。大きさは9×11 インチでした。」

これからあと1864年中は休みなく働いた。例のように他人の思惑を考えずガムシャラだったから周りの人びとは迷惑した。

「私の夫は始めから終わりまで、どの作品も喜んで見てくれました。新しい傑作がガラス板の上に浮かび上がるたびに、それを持って彼のところに走り、彼が心から褒めてくれるのを聞くのが私の日課でした。この濡れた写真をもって居間に駆け込む私の癖から、何枚とも知れないテーブルクロスが硝酸銀の頑固なシミで台無しになりました。もっと寛容でない家族だったら、私はとっくに追い出されていたはずです。」

硝酸銀水溶液はテーブルクロスを汚染するだけでなく、エプロン、スカートを汚すし、両手まで真っ黒に染める。それこそ「black art」である。神経質な Carroll は手が器用で厄介なコロジオン時代の写真術を巧みにこなしたが、Cameron 夫人タイプの人間は結果さえ良ければ満足するから操作には無頓着である。コロジオン湿板の定着にはシアン化カリウム（青酸カリ）を使うことが多かった。

Herschel は Cameron 夫人に警告している。

「猛毒のシアン化カリウムをそんなに手の上に注ぐなんて。お願い、頼むから、もっと注意して下さい。」

コロジオン液から発散するエーテルの異臭が家中に充満する。花壇は太陽に向けて並べられた多くの焼付け枠で占領される。家族も大変だが Cameron 夫人の不屈の勇氣にも感心させられる。彼女はヴィクトリア時代の上流夫人である。この人たちのほとんどは有閑夫人で、男のする写真など

を試みようと言う人はまずない。

それが Cameron 夫人は 48 歳になってから、しかも独力で写真を始めようと言うのである。冬の夜中ずっと、1 枚のプリント毎に井戸から汲み上げたバケツ 9 杯の水を、注ぎ続けて水洗しなければならない。もちろん Mary Ryan などのメイドも手伝ったのであろうが、並なみならぬ Cameron 夫人の意志と体力には感服しない訳にいかない。

こんな努力の結果、写真を始めて 4 ヶ月ほどしか経たないのに 1864 年 2 月 22 日 Ellen Terry の夫の画家 Watts に 39 枚のプリントを貼った最初のアルバムを贈ることができた。「Annie, My First Success」を貼ったのはもちろんである。第 2 番目のアルバムは 1866 年になってから故 Thackeray の娘 Annie に贈った。これには次のような警告文が自筆で書かれていたと言う。

「写真の大敵。コーヒー茶碗と紅茶茶碗。ローソクと石油ランプ。子供の指。」

「My First Success」のあと、しばらくして 1864 年 4 月にイタリア独立運動の志士 Giuseppe Garibaldi (1807-82) が Tennyson 邸にやってきた。それを聞いた Cameron 夫人は飛んでいって Garibaldi の前にひざまずいて写真を撮らせてくれと懇願した。硝酸銀で汚れた着物のままである。Garibaldi にしてみたら穢ない着物のイギリス女が、物乞いしているのしか思えない。乞食女と間違われて当然である。あとで Tennyson が取りなしてくれたが写真は撮らせてもらえなかった。

5 月になってロンドン「写真学会」写真展に出品した。これに対する写真界の批評と Carroll の感想についてはすでに説明しておいた。このあと 1868 年まで連続して出品し、あと 1870 年、1873 年と出品した。

Cameron 夫人は写真学会会員であるが例会には 1869 年 5 月に 1 回出席しただけである。

ロンドン写真展で Cameron 夫人の作品を見た Carroll が 7 月末になって Freshwater に Cameron 邸を訪ねてきた。その時の様子もすでに紹介しておいた。Carroll は夫人の作品の仕上げが汚いのと、その焦点ボケには感心しないと批評している。しかも彼の意見では夫人が「ワザと」焦点ボケにしているのである。

「彼女のはどれもワザと（purposely）焦点ボケに撮っており、ある物は大変に生きいきしていましたが、中にはヒドイのもありました。」

「The Illustrated London News」紙も同じような意見を述べている<sup>(57)</sup>。

「これらの写真の輪郭の柔らかさと拡がり、（あえて言えば）いかにも生きているように見える運動感は、単なるレンズの操作だけではなく、なにか機械的な工夫でなされているのではなかろうか。」

この「機械的工夫」説は1938年になってから写真史家 Beaumont Newhall が復活させた<sup>(58)</sup>。ガラス陰画と印画紙の間にガラス板を挟んで焼付け、故意に陽画にボケを与えたのではなかろうかと言うのである。

Gernsheim はこの「機械的工夫」説に反対である。

彼は Cameron 夫人のレンズを調査した P. H. Emerson の結果（1890）を取り上げて、焦点ボケの一部はこのレンズに固有の欠陥に由来するのだと主張した。Emerson はロンドンで有名なレンズメーカー Thomas Rudolph Dallmeyer（1859-1906）に頼んで Cameron 夫人が最初に使ったレンズを調べてもらった<sup>(59)</sup>。

Thomas は創業者 John Henry Dallmeyer（1830-83）の長男である<sup>(60)</sup>。ドイツ生まれの John は1850年イギリスに渡りロンドンで有名な光学機器商 Andrew Ross（1798-1859）に弟子入りした。Ross の次女 Hannah と結婚した John は Ross の死後その遺産の3分の1をもらって独立した。有名な「Rapid Rectilinear」（1866）を設計したのも彼である。Thomas が調べたところ Cameron 夫人のレンズはフランス製「Jamin」レンズであった。Jean Théodore Jamin はパリ光学機器商で、レンズは Voigtländer 社「Orthoskop」の模造品であった。もともと、この「Orthoskop」は有名なウィーン大学レンズ設計家 Joseph Max Petzval（1807-91）が1840年に設計した物である。このとき Petzval は肖像写真用と風景写真用レンズの2種を設計し、これらのレンズ研磨を Peter Voigtländer（1812-78）に依頼した。Voigtländer は需要の多そうな肖像写真用のレンズだけを研磨して、1840年11月から売りだした。このレンズは明るく、いろんな収差もかなり修正されていたから、爆発的な人気を呼びながく肖像写真家必携のレンズとして重用された。

Petzval が設計した風景写真用のレンズの方は忘れられた形になったが、

1845 年になって Petzval が風景、建築および大型複写用としてウィーン光学機器製作者 C. Dietzler に研磨と販売をやらせた。これは 1857 年に「photographischer Dialyt」（望遠鏡的写真レンズ）の名前で市場に出ることとなった。この 4 枚 3 群のレンズの後玉の屈折力が全体として負で、望遠レンズとして分類されるからこう呼んだのである。Voigtländer 社ではこれに対抗するため 1840 年 Petzval から預かっていた設計に従って同じレンズを作り、1858 年から「Orthoskop」の名前で売り出した。歪みの少ないレンズと言うので「Ortho」（正しい）を付けたのである。市場では Voigtländer 社の知名度が高いから、やがてこのレンズは「Orthoskop」の名前だけで呼ばれるようになった。ただし名前に似ず画像はフラットと言えず、歪みも大きかったからやがて使われなくなった。

Dallmeyer の調べた模造品「Jamin」レンズも同じ欠陥をもっていて、とくに色消しが悪かった。焦点距離 12 インチ（30.5cm）、直径 3 インチ（7.6cm）で固定絞り  $1\frac{1}{8}$  インチ（4.7cm）が付いていて F 6-7 で使った。

この焦点距離は Cameron 夫人のガラス板  $9\times 11$  インチ（ $23\times 28$ cm）に対して短すぎたが、彼女は中央部分だけしか使用しなかったから差し支えはなかったはずである。問題は不完全な色消しである。これによる焦点ボケは絞りを小さくすることにより是正されるが、固定絞りではこれが不可能である。その上に Cameron 夫人のセッカチがある。

焦点を合わすまで待てないのである。

「私の一番下の息子、Henry Herschel は今では大変に優れた写真家になっていますが、私の初期のピンぼけ写真の成功を『マグレ当り』（fluke）だと言います。これは本当に当たっています。それは焦点を合わせていて、非常に美しく見え始めると、私はそこで止めてしまったからです。ほかの写真家たちはどの人も、もっと焦点が合うようにレンズを回せと主張するのにです。」

その上に彼女は「レンブラント効果」を狙って、カーテンを閉じて僅かの隙間からの光線だけを使ったから光量が不足する。その分だけ露出時間が長くなるのは避けられない。それで露出時間は 3 分から 7 分と言う、いまでは考えられないほどの長さとなった。これでモデルが動かなかったらおかしい。焦点ボケに動きブレが重なる。露出時間は数を数えて測ったが

500 までも数えたと言う。Wilfrid Ward を撮ったときの様子を夫人は次のように手紙に書いている。

「400 から 500 数えて見事な写真が撮れました。哀れな Wilfrid はこんなに長く座っているのは、まるで殉教者の拷問のようだとこぼしました。これに対して私はありがたく思って座っていなさいと命令しました。私の方こそ殉教者ですよ。座る代わりに写真を撮ってご覧なさい。」500 数えるあいだ動かずにいる人間より、それを撮っている自分の方が殉教者 (martyr) だと言うのである。1867 年 7 月アメリカ詩人 H. W. Longfellow (1807-82) が写真に撮られるとき Tennyson は彼に警告した。

「君をおいとくよ。Longfellow 君。彼女の言うとおりにするのだよ。すぐに帰ってきて君の成れの果てを見届けてやるからね。」

Longfellow は「地獄だ」(inferno) と言ったそうである。

1866 年になって Cameron 夫人は 12×15 インチ (31×38cm) 版用の大型カメラを購入した。レンズは Dallmeyer「Rapid Rectilinear」(1866) で、これは球面収差も色収差も当時としては最高に修正されたレンズであった。焦点距離は 30 インチ (76cm) で各種のサイズの絞りが前玉と後玉の間に挿入できた。これを F8 に絞って使用した。レンズの焦点距離が長いから、どうしても焦点深度が浅くなり、焦点以外のところがボケる結果となる。そのうえ相変わらず照明が弱いから露出が長くなり、Cameron 夫人は動くなと命令するが、写される人間にしたなら「地獄」である。

次にもう 1 人「地獄」の苦しみを味わった若い婦人の告白を引用しよう。これは Cameron 夫人が死んでから 7 年あとの回想である。1874 年夏 Cameron 夫人は Tennyson 長詩「国王の牧歌」挿絵用の写真を撮っていた。適当なモデルがないと Wight 島に避暑に来ている人間を強引にスタジオに引き込む。この婦人は「Vivien and Merlin」場面の美女 Vivien 役をさせられたらしい。誘惑に負ける老魔術師 Merlin 役には 80 歳に近い Cameron 氏が引っ張り出されている。

「今でも覚えています、スタジオは汚くて居心地が良くありませんでした。Cameron 夫人は私の頭の上に王冠をかぶせて女王の役にしました。これは退屈でしたが、露出はこの倍も大変でした。露出のまえに Cameron 夫人は露出が長くかかると警告しました。そして半ば唸るよ

うに、これが大型の感光板を使うときの唯一の困難だと付け加えました。現像は大したことではないらしいのです。露出が始まりました。1分が過ぎて私は叫び出しそうになりました。2分で私の目は飛び出しそうになり、3分で私の頸のうしろは痛風にかかったようになりました。4分で大きすぎた王冠が落ちそうになり、5分で全くダウンしてしまいました。それと言うのも、大変に老人の Cameron 氏が耐えきれずに、大切なところで声を出して笑い出したからです。これには私も自制が効かなくなり哀れな老人に合わせて一緒に笑ってしまいました。Cameron 夫人が Mary を助手にして、大きな黒いガラス板を持ってきて、私が動いていると言いました。私はそのとおりだと言う以外に言葉を知りませんでした。Mary (中崎注: Cameron 家のメイド, Mary Hillier) は美人で多くの写真を撮られ、写真『マドンナ』で知られていました。

1 番目の写真は『ブレ』の連続で 2 番目もそうでした。3 番目のはまだましでしたが、頭支え (headrest) なしで 10 分間も立っている拷問は言葉では言い表せません。このときの写真は今でも持っております。顔と王冠には 6 つの輪郭が出ています。しかし Cameron 夫人の目的が女王 Zenobia (中崎注: 古代パルミラ王国の悲劇の女王) の悲しみと絶望の最後を表現するのだったら成功だと言えるかも知れません。」

この若い婦人は古代パルミラ王国の悲劇の女王 Zenobia の役目までやらされたらしい。

## 11. Cameron 夫人—豊かな収穫期 (1867-70 年)

「私の最初の成功」から 1 年経って 1865 年 5 月に Tennyson の写真を撮った。Tennyson はこの写真を「Dirty Monk」(汚い修道僧)と呼んだ。「その間に私はまた別の不朽の人の肖像を撮りました。これは Alfred Tennyson のもので、その横顔の写真は彼が『Dirty Monk』(汚い修道僧)と呼んだものです。これはイザヤとかエレミア (中崎注: 旧約聖書の預言者) にピッタリの写真で Henry Taylor は Tennyson の最高の詩と同じほど優れていると言ってくれました。この桂冠詩人はこれについて Mayall (中崎注: アメリカ写真家) の物を除けば、これまで撮られたどの写真より好きだと言っております。」



以後この写真は多くの Tennyson 詩集、全集の巻頭を飾ることとなる。

この年にはベルリン写真展に出品して銅メダルをとった。ベルリンには次の年 1866 年にも出品して今度は金メダルを獲得した。Tennyson の写真を撮った 1865 年には Carroll「不思議の国のアリス」が出版された。このころ Cameron 夫人は技術的にも自信が付いたとみえて、流行の Rejlander, Robinson ばりの「芸術写真」に手を染め始めた。ただし彼女のは「合成写真」ではない。Carroll はそれほど潔癖ではなかったが、Cameron 夫人は頑固に修正を嫌ったからほとんど合成写真はつくらなかった。それで夫人の「芸術写真」は「活人劇」(tableau-vivant) を写真に撮っただけの物となった。女役は乞食メイド Mary Ryan が、男役は Henry Taylor が勤めてくれた。

「われわれの親友、Henry Taylor 卿は私の初期の作品に大いに力を貸してくれました。私の言うままにポーズを取ればバカを見るかも知れないなどお構いなく、自らを顧みない愛情からの広い心遣いで、次つぎと付き合ってくれました。火搔き棒を笏の代わりに握って Juliet を相手に Laurence 修道士（中崎注：『ロメオとジュリエット』）を、Miranda を相手にミラノ公 Prospero（中崎注：『テンペスト』）を、女王 Esther と共に Ahasuerus 王（中崎注：旧約聖書『エステル書』）を、私の望みに合わせて演じてくれました。」

これらの習作を集めて 1865 年 11 月から次の年 1866 年 1 月にかけて、個展をロンドン「Colnaghi」画廊で開いた。このとき会場でのプリント販売と説明役を 17 歳の Mary Ryan にやらせた。会場で Mary を見染めた青年 Henry Cotton が求婚し、1867 年 8 月になってから Freshwater で結婚式を挙げる運びとなった。Cotton は名家の出であとインド民政局の高官 Cotton 卿となる。

1866 年 12 月にもロンドン「French」画廊で個展を開いた。このような個展開催にはプリント販売で収入を挙げようと言う目算があった。この年セイロン島コーヒー園は不作で財政が苦しくなり、Cameron 夫人はこのプリント販売で自分の道楽の写真に要る費用を稼ごうと考えたのである。もちろん、これだけで賄えるはずがない。オックスフォード大学在学中の 3 男 Hardinge は中退せざるを得なくなった<sup>(61)</sup>。

それでも直ぐに Cameron 家の屋台が傾いた訳ではなくて、彼女の道楽はあと9年間ほど続く。

このころの Cameron 夫人の経済音痴を物語る次のようなエピソードがある。あるとき彼女は写真廃液から銀を回収する報告を読んだ。すぐに廃液をビンに詰め、馬車を雇ってロンドンに向かった。ロンドンでは面識もない Rejlander を訪ねて銀を回収するように頼んだ。

Rejlander は驚いたに違いない。回収しても銀の値段は馬車代より遙かに少なかったのである。

1867年にパリ国際写真展に出品した。またこの年4月に Herschel を「Collingwood」邸に訪ねて肖像写真を撮らせてもらった<sup>(11)</sup>。

「こんな人物のまえにカメラを据えると、私の全精神はこの人物の外貌はもとより、内なる偉大なものを忠実に記録するのが、その人に対する私の義務だと思って努力しました。こうして撮られた写真はほとんど私の祈りを具現した物と言えます。この感情をもっとも真剣に抱いたのは私の尊敬し愛するあの有名な友人 John Herschel 卿の写真を撮ったときです。」

1868年1月から2月にかけて、またロンドン「German」画廊で個展を開いた。このころになると Cameron 夫人に対する一般の批評もかなり好意的になった。この夏にはまた、Charles Darwin が家族で Freshwater に避暑にきた。「種の起原」は3年前に出版されて評判になっていたから、Cameron 夫人が Darwin の肖像写真を撮らせてもらったのは言うまでもない。Darwin 一家が Freshwater を発つとき Cameron 夫人は Darwin に彼の肖像写真を贈った。Darwin は島で夫人の家の経済を聞いていたのであろう代金を支払った。いままでの彼女なら受け取らなかったであろうが、夫人は喜んでこれを受取り帰って夫にみせた。

「ご覧、Charles。大金でしょう。」

Darwin はこの写真が気に入り、自分のどの写真より好きだといった。

1869年5月に Cameron 夫人は始めてロンドン「写真学会」例会に出席した<sup>(62)</sup>。

このとき Cameron 夫人は2年前に撮影した Herschel のガラス陰画を提示して、この膜面のひび割れの原因を究明して欲しいと願った。Tenny-

son の大型ガラス陰画も同じ被害を蒙っている。全部で 45 枚ものガラス陰画の膜面がひび割れして駄目になってしまった。

これに対して J. B. Reade (1801-70)<sup>(63)</sup> や V. Blanchard (1831-1901) などが答えた。Freshwater は海に近いから空気のなかに塩分が多いのではないかと言う説も出た。結局、湿気と塩分を防ぐために紙に包んで保存すると良いと言う意見に落ち着いた。彼女が例会に出席したのはこれが最初にして最後である。

この年にはまた Tennyson 一家が Surrey 郡 Blackdown 「Aldworth」居館に引っ越した。

Tennyson は 1892 年に死亡するまでこの屋敷に住んだ。

Gernsheim は Cameron 夫人の 1867 年から 1870 年にかけての写真活動を第 2 期と呼んで、この時期がもっとも生産的でまた優れた作品が多いとしている。その中で優れた作品は大型のクローズアップ肖像写真である。「活人劇」写真にも良いものがあるが、大型肖像写真と較べると見劣りするの否めない。しかし女性群像、たとえば「Summer Days」(1866)などはまずまずの出来と言えよう。

クローズアップ肖像写真は必ずしも Cameron 夫人の独創ではない。

イギリス写真家 David Wilkie Wynfield (1837-87) は友人の芸術家に古風な衣装をつけさせて、そのクローズアップ写真を撮っていた。たとえば詩人 Dante に扮した画家 Millais などである (1866)<sup>(64)</sup>。Cameron 夫人はこれらの作品に敬意を払っていたが、こんな衣装を取り除いて生の人間の個性に迫ったところに Cameron 夫人の独創性がある。彼女は「その人物の内なる偉大なものを忠実に記録するのが」自分に課せられた義務と考え、その結果を「ほとんど私の祈りを具現したもの」とまで言っている。

1871 年 5 月 11 日にはあれほど敬慕した John Herschel が Collingwood 邸で死亡した。79 歳であった。この年、11 月 11 日に 4 年間もセイロン島にいた息子の 1 人と Brockenhurst 駅で会ったエピソードについてはすでに説明した。

そして 3 年あとの 1874 年になって最愛の長女 Julia が 6 人の子供を残して死亡した。Cameron 夫人が写真を始めたのは、ちょうど 10 年前にこの長女夫妻がカメラを贈ってくれたからである。そんな追憶からか、それ

以後10年間の写真遍歴を文章にする気になった。娘を失った傷心がこれで癒えるかも知れないと考えたのである。「私のガラスの家の記録」を書き始めた。この全訳が「付録」である。書きかけたが直ぐに Tennyson 長詩「国王の牧歌」挿絵写真撮りで忙しくなり途中で止めてしまった。この未完の手書きの原稿は死後に発見され、1889年4月ロンドン「写真学会」Cameron 夫人追悼写真展のカタログに印刷された。1927年11月ロンドン「写真学会」写真展で手書きの原稿その物が始めて展示され、これはあとで孫娘から写真学会に寄贈された。

もともとこの形のままで発表するつもりはなかったのであろう。内容に不統一が目立ち感情を剥き出しにしたところがある。しかし、逆にこれから Cameron 夫人の生の性格などを伺い知ることでもある。たとえば同時代の写真家 Robinson, Mayal に対する激しい競争心などがそれである。また俗物性、成金根性などへの反感は、彼女に肖像写真を頼んだ Donkins 嬢の手紙に対する手痛い批評の中に現れている。

総じて言えば「私のガラスの家の記録」は、Tennyson 的女性であった Cameron 夫人像を巧まずして浮き彫りしていると言えよう。

## 12. Cameron 夫人—Tennyson 「国王の牧歌」挿絵写真と彼女の死

Tennyson アーサー王物語長詩「国王の牧歌」は1859年に最初の4編が発表され、1869年に4編が加えられ、「アーサー王の死」を含む最後の2編が1872年に発表されて完結した。それを受けて1874年8月に Tennyson が Cameron 夫人にこの挿絵写真を撮らないかと持ちかけた。もちろん彼女は乗り気である。それに、これで少しはお金が入るかも知れない。現にフランス人画家 Gustave Doré (1832-83) は「国王の牧歌」の挿絵を描いて一財産を築いているではないか。すでに Tennyson 詩集を出版していたロンドン Henry S. King 出版社もこの計画に賛成であった。

全体を2冊にして、1冊にはそれぞれ巻頭に Tennyson 肖像「汚れた修道僧」を入れ、あと12主題に分けた12枚の挿絵写真を貼った。まだ写真印刷の技術が発達していなかったから、すべて焼付けでつくった紙陽画である。だから本というより写真アルバムと呼んだ方が正しいだろう。写真の大きさは10×14インチ(26×36cm)で、写真の間のページにはその

シーンに該当する Tennyson「国王の牧歌」からの抜粋を載せた。これは Cameron 夫人の手書きを石版印刷にしたものである。

Tennyson の依頼を受けてからの 3 ヶ月は例のエネルギーを発揮してガムシャラに働いた。もともと Cameron「Dimbola」邸のパーティーの余興には詩の朗読、合唱、ダンスそれに素人芝居まであったから、芝居気の多い人間がそろっていた。問題は物語にふさわしいモデルである。アーサー王には Yarmouth 波止場の運搬夫 William Warder を見つけた。

王妃 Guinevere には例の手を使って Freshwater に避暑に来ていた若い婦人を誘い込んだ。しかし騎士 Lancelot のモデルがない。また小道具や衣装も今までのように家にある物だけでは足りない。鎧などはロンドンから送ってもらった。だいたい 1 シーンに 100 枚は撮影したというが、これは少しオーバーであろう。

この「活人劇」写真の構図などにはラファエル前派の影響が色濃く見て取れる。ふだん Cameron 夫人は親友の画家 Watts から批判や指導を受けていたから当然である。第 1 冊は 1874 年 12 月に出版され、2 冊目の出版は 1875 年 5 月になった。

Doré の挿絵は成功であったが、Cameron 挿絵「写真」は成功とは言えなかった。Watts もそうだが Cameron 夫人も写真と絵画の領域を弁えていないのである。「悪の華」のフランス詩人 Charles Baudelaire（1821-67）は 1859 年すでに言っていた<sup>(65)</sup>。

「しかし、もしそれ（中崎注：写真）が微妙で感知できない領域とか、想像の領域とか、とにかくその価値が人間の魂に何を付け加えるかによって判断されるような領域に進入してきたら、それはわれわれの害になるだけのことだ。」

始め写真はフランス官展「サロン」への出品が許されなかった。それを 1856 年になって Nadar が抗議した。アカデミーでは 7 人委員会に謀って 1859 年から出品を許可した。ただし、まだ入口は別である。Baudelaire の感想はこの写真展を見ずに書いた物である。

こんな事は当時の人にも分かっていたのである。そのころの人気風刺漫画家 Honoré Daumier（1808-79）の作品を考えて見るだけで明瞭であろう。写真は彼の風刺漫画を忠実に複写できるが、写真に Daumier の風刺

漫画が描けるかと質問するのは愚かである。

まえに 1889 年 Cameron 夫人没後 10 年記念写真展について触れておいた。このとき出品された Cameron 夫人の作品を見た皮肉屋の Bernard Shaw (1856-1950) は次のように言っている<sup>(66)</sup>。

「Herschel, Tennyson, Carlyle の肖像は私の今まで見たどれよりも優れている。しかし、これと同じ壁に、しかも同じ枠に子供の写真が数枚ある。これらはほとんど裸であるか形だけの下着を着けている。それがペラペラの紙の翼をつけられて、それに全く無趣味にも天使とか妖精とか名前がつけてある。素晴らしい Carlyle の肖像を撮ったと同じ作者がこんなに子供っぽい愚作を撮ろうとは誰が想像できるだろう。」

この中の「ペラペラの紙の翼をつけた天使」は「新しい年の始め」(The Rising of the New Year) と題された 1872 年の作品である。現在は Shaw のときからでも 100 年経っている。Cameron 夫人の声価はほぼ定まったと見てよい。その代表は Gernsheim の次のような意見であろう<sup>(67)</sup>。

「今から思うと Cameron 夫人の作品に対する、写真界からの激しい反対はもう収まったように思える。反対に彼女の崇拜者が惜しみなく注いだ過剰な賞賛も、その輝きを少し失っている。われわれは彼女の力強い肖像写真には打たれるが、多くの作り物の写真はヴィクトリア時代風が過剰で子供っぽく感じられる。」

Tennyson 「国王の牧歌」の 2 冊目が出版されたころ Cameron 家は引越しの準備に忙殺されていた。Cameron 氏はまえから若いときに過ごしたインドへ、もう一度帰りたいと願っていた。すでに 10 年前 70 歳のときセイロン島知事の話があったが、友人たちが彼の健康を心配して断わるように忠告していた。

しかし 80 歳のこの 1875 年になって、愛するセイロン島を自分の最後の土地としたいと心に決めた。自分の健康は航海に耐えられないかも知れない。もう 10 年も外出したことがないのである。それでもよい。

Cameron 夫人始め友人たちは反対したであろうが彼の決心は固い。それに Freshwater 「Dimbola」邸と大家族を維持するのは限界にきている。セイロン島には前から息子も暮らしていた。Cameron 夫人も長く自分を温かく見守ってくれた夫の最後の願いを叶えてやりたいので終わりには賛

成した。荷造りや航海の準備はオックスフォード大学を中退した Hardinge がすべて引き受けてくれた。

出発は 1875 年 10 月末となり Freshwater 住民の全てが別れを惜しんだ。中には Southampton 港まで見送りに来てくれる人もいた。セイロン島にやっと落ち着いた 1876 年復活祭に、始めて Cameron 夫人は Tennyson 夫人に手紙を書くことができた。そのうちに写真も始めるようになった。スタジオがないから全て戸外の撮影である。イギリスに住んでいたときは Wight 島や Freshwater の風景を撮ったことのなかった彼女が、Dimbula 溪谷の滝を撮ってフランス人画家 Gustave Doré に送った。これが現存する Cameron 夫人のおそらく唯一の風景写真と言うことになっている。この他にセイロン島で撮った物の中には島の女やその群像の習作が残っている。

Cameron 夫妻は 2 年後の 1878 年春にあまり人に知らせずにイギリスに帰った。おそらく Freshwater の家の後始末などがあつたのであろう。1 ヶ月ほどロンドンで暮らしたあとセイロン島に帰った。セイロン島ではコロombo 南方 40km の海岸町 Kalutara にある官舎に落ち着いた。3 男の Hardinge はセイロン島政庁に職を得てここに住んでいた。数 ヶ月して Hardinge の具合が悪くなったので、末息子 Henry Herschel のコーヒー園のある Dikoya 溪谷バンガローに移った。ここの方が涼しくて気候が良かったのである。Hardinge はここで健康を取り戻したが、今度は母親のほうに風邪をこじらせて 10 日寝ただけで死亡してしまった。

1879 年 1 月 26 日のことで彼女も 63 歳になっていた。

死ぬまえに窓を明けさせて夜空の星を眺め「Beautiful」と言ったのが最後の言葉となった。

彼女の亡骸は 2 頭の白い牛が曳く車に載せられて、2 つの峠を越し 15 km 離れた谷間の町 Dikoya の小さな「St. Mary」教会の墓地に葬られた。

周りには高い峯が町を囲むようにそびえ中央に河が流れていた。

Cameron 氏は息子 Hardinge とともに Kalutara 官舎に帰ったが、翌年の 1880 年春にはまた Henry Herschel のバンガローで過ごし、ここで 5 月 4 日に亡くなった。彼も 85 歳になっていた。死の床では父親の願いで息子たちがホーマーの詩句を朗唱した。彼の亡骸も妻と同じように 2 頭の

牛の曳く車に載せられ、2つの峠を越して Dikoya に運ばれ、この谷間の小さな「St. Mary」教会に眠る妻の墓の横に葬られた。

### 13. Carroll—1880 年写真放棄からその死まで

Cameron 氏がセイロン島で死亡した 1880 年、この年 Carroll も 24 年間続けていた写真道楽を止める決心をしている。Carroll のことは Freshwater に Cameron 夫人を訪ねた 1864 年夏休みと、「不思議の国のアリス」が出版された 1865 年暮れまでの記述で止めたままである。

次にこの 1865 年から写真を止めるにいたる 1880 年まで 15 年間の Carroll の軌跡を駆け足で辿ってみよう。

1867 年 5 月に始めて少女の裸体写真を撮った。

「1867 年 5 月 21 日：L 夫人が Beatrice を連れてきた。2 人の写真を撮り、あとで Beatrice だけを数枚撮った。」

裸体写真撮影の記入はこれが最初である。「裸体」と書くのが気が引けたのかフランス語で「sans habilement (正しくは habillement)」と書いてある。聖職についている Carroll であるから、この行為がスキャンダルの種にならないように細心の注意を払った。たとえば必ず両親か年輩の保護者に同席してもらうなどである。また撮った写真の管理も厳重にした。当然のことだがアルバムには貼らなかった。自分の死後これらの写真は両親に返すか破棄するように遺言している。だから現存するのは 1 枚もないそうである。これほど注意しても他人が疑いの眼でみるのは避けられない。

「不思議の国のアリス」で成功した上に派手な劇場通いをしては目立つ。まして独身で「変人」でとおっている Carroll である。

やがて裸体写真の件が彼を巡るスキャンダルの 1 つとなる。

5 月 30 日にオックスフォード大学サンスクリット学者 Max Müller (1823–1900) とその娘 Ada, Mary の写真を撮った。

この 5 歳と 6 歳の娘について「このところ見た中でもっとも可愛らしい子ら」と書いている。日本から南条文雄 (1859–1927) が留学して Müller に師事する 12 年前である。

6 月 26 日にはアメリカ実業家 George Peabody (1795–1869) を撮った。アメリカ Salem「Peabody 博物館」で知られた大金持ちである。



この1867年の夏休みには友人 Henry Liddon 博士（1829-90）とロシア旅行をした。彼が外国旅行をするのは生涯これだけである。長旅でしかも外国旅行であるから、嵩ばった写真道具の携行は止めにしてスケッチ帳だけにした。この年はまた彼の新しい初等数学書「行列式の初歩」(An Elementary Treatise on Determinants) が出版された。「不思議の国のアリス」を読んで楽しんだヴィクトリア女王は Carroll に次の本ができたらずひ送るように頼んでいた。送られてきたオックスフォード大学数学講師 C. L. Dodgson 著のこの本を前にして女王は困惑したことであろう。

次の年1868年6月12日に父親が Croft 牧師館で死亡した。残された遺族はここに住めないから Surrey 郡 Guildford 「Chestnuts」館に引っ越した。これから Carroll がクリスマスに帰省するのはこの「Chestnuts」館である。この年の11月に宿舍「Tom Squad」の西北隅の大きな部屋が空いたのでここに移った。このとき屋上にスタジオ建設を申請した。ただしこれは直ぐには実施されず完成するのは3年先になった。

1871年暮れに「鏡の国のアリス」(Through the Looking-Glass, and What Alice Found There) が出版された。まえの「不思議の国のアリス」は地下のトランプ国の物語であったが、こんどのは鏡の中のチェス将棋の国の物語である。物語の主人公は相変わらず幼い Alice であるが実在の Alice は19歳になっている。すでに「小川が河と交わっている」年頃である。Alice の美貌は Cameron 夫人も知っていて頼んでモデルになってもらった。Cameron 夫人の習作の中にはこのころの Alice の単独の肖像写真や群像が残っている。

1871年10月に「Tom Quad」スタジオが完成したので、このころから子どもに衣装を着けさせて「活人劇」めいた習作を試み始めた。

Cameron 夫人と同じころである。ある婦人が自分が幼いころの回想を書いたものの中に次のようにある<sup>(68)</sup>。

「オックスフォードの子供たちにとって、もっとも鮮明な思い出は写真を撮られると言う大きな経験でしょう。暗い桎の階段を登って『Tom Quad』(学寮)の外へ出て、部屋の真上のスタジオへ行ったことを、子供たちはどんなにかよく覚えていることでしょう。奇妙な薬品の臭いと一緒に、彼がガラス板を現像した神秘的な暗い押入が思い出せます。変

な衣装を着せられた更衣室，そこでトルコ人，シナ人，漁師の子になって1人または他の子とグループで，とても注意深くポーズをとらされるときの少し厳粛な儀式など。男の子も女の子も写真を撮ってもらいましたが，それが本当に有難かったかどうかでは意見が分かれるでしょう。Carrollさんはいつも写真は『チャント』撮るのだと，決心していましたので忍耐を強いられました。スタジオは大変に暑く，動かないでじっとしているとひどく疲れて，子どもたちの顔に退屈が浮かんでくるのは避けられませんでした。それでも時にはご褒美として，平らな屋上に出てオックスフォード塔を見せてもらうこともありました。」

また暗室では現像をみせてもらった<sup>(69)</sup>。

「写真を撮られるよりもっとエキサイティングだったのは，暗室に入れてもらって彼が大きなガラス板を現像するところを見せてもらったときでした。」

筋書きのある「活人劇」写真となると構図が大切となる。CarrollはRuskinの忠告にしたがって人物スケッチを始めた。

「1874年6月27日：人物写生(drawing from life)をまた始めた。」CarrollもCameron夫人と同じようにBeaudelaireが非難した袋小路に落ち込んでいる。確かに人気挿絵画家Tennielの「アリス物」挿絵は専門家らしく美しく整っている。売り物だから当然である。だがCarrollがAliceに送った「Aliceの地下冒険」の手書きの挿絵には，彼でなければ描けない素晴らしいファンタジーの世界が展開している。

彼には人物写生の練習など必要ないのである。

1875年6月にLeopold王子の写真を撮った。ヴィクトリア女王の1番下の王子で，この年オックスフォード大学Christ Church学寮に入学したのである。

「1875年6月2日：王子は11時半ころ独りで来た。あとからCollins氏がやってきた。王子は1時ころまでいて，私は2枚写真を撮ったがどれも動いていた。」

この年の夏休みは何を思ったのか，7月31日から8月12日にかけて写真陰画アルバムの整理をした。もともと気に入らない原板は捨てて新しいのと差し替えていた。なにしろ年間2000通もの手紙を書き，それに対する

返事も含めてメモをとり、それらを 98721 個のクロスリファレンスで結んでいた几帳面な男であるから、アルバムの整理にも手間がかかる。しかし、その割には分かりにくい分類になっているのだそうである<sup>(70)</sup>。紙陽画プリントのアルバムの方は現在 12 冊が残っている。その中の 6 冊には (1, 2, 3, 6, 7, 10) と番号が付いていて、(4, 5, 8, 9) の 4 冊が欠けている。また貼ってあるのが全て Carroll の作品とは限らず、中には Cameron 夫人の初期の作品なども混じっている。ガラス陰画に付けられた番号で、もっとも大きな数字は (2641) だと言う。これが通算の枚数だとすると 24 年にもおよぶ Carroll の写真道楽の成果としては少な過ぎるように思われる。4000 枚程度が妥当な数ではなかろうか。

Cameron 夫人は 15 年間に 4000 枚は撮ったと推定されている。

次の年、1876 年に「スナーク狩り」(The Hunting of the Snark) が世に出た。1879 年に Cameron 夫人が死亡し、1880 年には Cameron 氏の死が続いた。

1879 年に出版した「Euclid and His Modern Rivals」は真面目な数学研究である。このころから Carroll の作品には次第に軽さが姿を消し始めている。このころからオックスフォード囁かれたした Carroll に関するスキャンダルが原因になっているのかも知れない。そんな、こんなで嫌気がさしたものが写真道楽を止める決心をした。

1880 年 7 月 15 日 (48 歳) の日記の記載が写真に関する最後である。

「1880 年 7 月 15 日：午前中は焼き付けでつぶす。3 時に Gertrude Drage と Gerida 姉妹がきた。2 時間かけて写真を撮る。そのあと定着、金調色を 7 時まで。」

写真を止めたから女友達の写真には、彼女らをロンドンへ連れて行って専門の写真家に依頼することにした。よく行ったのが Cameron 夫人の末っ子 Henry Herschel Cameron 写真館である。Henry Herschel は母親に似て写真派らしく奇麗に撮ることなど考えなかったらしい。

「不思議の国のアリス」の舞台で始めて Alice を演じた Isa Bowman は次のように言っている<sup>(71)</sup>。

「Cameron さん（中崎注：Henry Herschel）の撮って下さった写真はとても恐く写っているみたい。でも Lewis Carroll さんは、これこそ肖像

写真のお手本だとおっしゃるのです。」

次の年(49歳)の1881年10月18日には25年勤めた数学講師を辞職した。この日の日記に次のようにある。

「1881年10月18日:これからは全ての時間を使える。もし神さまが私に生命と力を続けてお恵みくださるなら、私が衰えを知るまでに何か物になる書き物を完成したいものである。それらは数学教育、子供向けの無邪気な娯楽物、そしてできたら宗教物(そんな仕事をしてても無駄かも知れないが)である。

これからの私の新しい生涯は神さまのご意志に従って使うのだが、この新しい生涯に神さまの祝福が授けられますように。」

新しい生涯を始めるに当たっての決心である。講師は辞めても聖職はそのままであるから「Tom Quad」には続けて住むことができた。

数学講師を辞めたときの決心に従って数学の著作が続く。「Euclid, Book I and II」(1882)。そして1889年には「Sylvie and Bruno」が出た。この作品にはナンセンスもさることながら、より道徳的な側面が表面に出て、Carrollの回心がここにも現れている。次の年の日記には次のようにある。Carrollはまだ58歳だが自分の死を見つめている。

「生命の残りが少なくなり夕闇が迫ってきた。もう単なる娯楽のための時間を惜しまねばならない。さもないと最後の時が訪れるとき、完成しようとしてそれに至らなかった仕事、半分し残しのままになるかも知れないのだ。」

3年あとの1893年に「Sylvie and Bruno」物語を完結させた。「Sylvie and Bruno, Concluded」である。1896年に出した数学論理学「Symbolic Logic」が最後の著作となった。彼らしい数学ロジックが展開されている作品である。2年あとの1898年(明治31年)1月14日妹たちの住むGuildford「Chestnuts」館で死亡した。66歳であった。

この「写真史シリーズ」論考を書くにあたって、いつものように大阪帝国大学理学部化学科 小竹研究室の先輩 大庭成一博士、富士写真フイルム株式会社 富士宮研究所 安達慶一、武田薬品工業株式会社 創薬第3研究所 青野哲也の諸氏に大変お世話になった。また文献の収集では、大阪大学附属図書館 参考係 今井義雄、永田敏恭、東田葉子、中京大学附属図書館 参考係 清水守男、田中良明の諸氏

から多大の援助を賜った。この機会にこれらの皆様に厚く感謝の意を表する次第である。

## 付 録

### Julia Margaret Cameron 「私のガラスの家の記録」(1874) (Annals of My Glass House)

Cameron 夫人の写真はもう 10 年にもなり、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアへも行っていてそこで歓迎を受けました。これで自信ができたので、もう舌足らずで口ごもることもなく、発言してもよい時期かと思います。それで、この「私のガラスの家の記録」も広く世間に受け入れられるかも知れません。私はこれに衣装をまとわせるように光を当て、これに関連した人びとの生きたエピソードを添えましたので、この私の倦むことを知らなかった仕事を正直に物語ることの意義が余計に高められたものと思います。

ちょっと考えたら本能的に知れるように、全く個人的なことや感情に触れる細部は避けるべきでしょう。それはあの国民的詩人（中崎注：Tennyson）の高貴な教えその物です。

聡く（さとく）あれかし。  
奥に秘めたる花嫁の  
秘密の小部屋を閉ざす扉を、  
押しひらく輩（やから）は  
よもたやすくは許されまじ。

こんな訳で私は努めて感情に流されるのを抑えて、私の初めての（中崎注：カメラと）レンズについて次のように言うにとどめましょう。これは私の今は亡き最愛の娘とその夫（中崎注：長女 Julia とその夫 Charles Norman）がこんな言葉と共に贈ってくれた物です。「お母さん。Freshwater で寂しいときは、写真でも撮って遊んでみたら。」

私があんなにも愛した人たちからのこの贈物は、私の心の奥に秘めた美への憧れを次第に強く揺り動かし、始めから私はこのレンズを優しい熱情をこめてあつかいました。

それでレンズはまるで、物を言い記憶をもち創造力に溢れた生き物のようになりました。1864 年はなん週間もなん週間も、休みなく働きました

が結果は出ませんでした。

それでも希望がなかった訳でもありません。

群れなす希望（のぞみ）よ。

そは翼（つばさ）ある虚言の如く拡がらんとし、

目にし耳にする全てから生じて、

わが心と魂を揺り動かさんとす。

私は私の前に現れる美しいもの全てを捕らえようと熱望し、その思いはとうとう叶えられたのでした。それは困難であるだけ余計に追求する価値があったのです。始め写真術など全く知りませんでした。私はカメラ（dark box）をどこに据えればよいのか、モデルにどう焦点を合わせるのを知りませんでした。なんとまあ、初めての写真は私がガラス板の薄いフィルム面を手で持ったので消えてしまったのです。

それは Freshwater のある農夫の写真で、彼は思いなしか Bollingbroke に似ていました。この島の農民はとてもハンサムなのです。私の写真の愛好者は誰も知っているように、男も女も少女も子供も全て私の愛すべき対象でした。

この農夫に私は1時間、半クラウンを払いました。何度も半クラウンを払い、何時間も試みた末にやっと最初の写真ができました。しかし、勇んでこれを乾燥しようとして、擱んで駄目にしてしまいました。私は石炭小屋を暗室に変え、息子たちに与えていたガラス張りの鶏小屋をスタジオ（glass house）にしてしまったのです！ 鶏たちは放されました。食べられはしなかったと希望し信じておりますが。生みたて卵を集める息子たちへのお小遣いはなくなりましたが、家族のみんなは私の新しい仕事に協力してくれました。それは鶏や雛との付き合いが、詩人、先覚者、画家、美しい娘さんたちとの付き合いに変わったからです。そして、やがてこの人たちが私の粗末で小さな百姓小屋を不朽のものにしてくれました。

この農夫で成功したので、今度は2人の子供を撮りました。私の息子 Hardinge がオックスフォード大学の休暇で帰ってきて、難しい焦点合わせを手伝ってくれました。見事な写真になるはずの撮影中に、子供の1人が吹き出して写真を駄目にしてしまいました。

それで次からは欲張らずに女の子を1人だけにして、もし動いたらかわ

いような Cameron 夫人の薬品や努力が水の泡になるのだよと、彼女の同情に訴えました。この訴えが功を奏して「私の最初の成功」(My First Success) と呼んだ 1 枚の写真ができたのです。私は喜びに有頂天となり、家中を駆け回ってこの子への贈物を探しました。まるでこの子が 1 人で写真を撮ってくれたように思えたのでした。私はこれを焼き付け、金調色し、定着してから枠に入れてその日のうちに女の子の父親に贈りました。大きさは 9×11 インチでした。

愛らしい亜麻色の髪のかわいい Annie（中崎注：Annie Philpot）ちゃん！この喜びの思い出は、あとでもらったどの賞によっても、消えることはありませんでした。この愛らしい Annie もいまは 18 歳です。もう一度彼女に会って今度は私の上達した腕前で、写真を撮ってみたいと切に願っています。

これが私の出発点で、これ以上つまらない細ごましたことに、読者を引き止めたくはありません。これから先は、ただ働き豊かな収穫を刈り取ればよかったのです。

私の一番下の息子、Henry Herschel は今では大変に優れた写真家になっていますが、私の初期のピンぼけ写真の成功を「マグレ当り」(fluke) だと言います。これは本当に当たっています。それは焦点を合わせていて、非常に美しく見え始めると、私はそこで止めてしまったからです。ほかの写真家たちはどの人も、もっと焦点が合うようにレンズを回せと主張するのにです。

1865 年から写真を展覧会に出品し始めました。スコットランドにも数枚送ったのです。Henry Taylor の肖像写真では光が口では言えないほどに美しくその顔を照明していました。またラファエル風の聖処女「La Madonna Aspettante」（聖水を受けるマドンナ）もありました。これらの作品はいまでも残っていますが、これ以上の物は撮れないと信じます。しかし賞はもらえませんでした。賞を受けたのは「Brenda」と題する作品でした。この事から、まだ成熟期にあった写真展の審査員たちには、テーブル掛け、椅子、枠スカート (crinolin) などの細かいところが大切なのだと気が付きました。この哀れな作品のあとで、「Brenda」の作者（中崎注：Henry Peach Robinson）は随分と腕を上げたので私は彼と競争しても構

いません。だが相変わらず写真と技術に重きをおく審査員が、私の負けにしても不満には思いません。

しかし芸術家たちはすぐさま私に栄冠を授けてくれました。

私の「Fame」は「高貴な精神の衰弱の現れ」と批評されましたが、私の尊敬する審査員たちは私の作品の価値を認め推奨してくれましたので「わが魂は空の虹のごとく舞い上がり」ました。

私は熱意を新たにすることを告白しなければなりません。

ロンドン「写真学会」はその「学会誌」で批評をしましたが、その批評をそのまま受け取っていたら大いにガッカリさせられたことでしょう。それは物言いがズケズケであまりにも不公平だったので、真面目に取り上げる気にもなりません。しかし、もっと寛大で目先の効く審査員は私の作品に対して壁に大きなスペースを与えてくれたので、それについて皮肉や意地悪が書かれる結果となったようです。

ついで私はドイツにも作品を送りました。写真のメッカ、ベルリン市は最初の年には銅メダルを、そして次の年には金メダルを授けてくれました。イギリスの学会では「Hartly Institution」が銀メダルをくれました。多分、私の家が Southampton に近かったので私の成功をお国自慢にしたのだとおもいます。また個人的な同情も私を大いに力づけてくれました。私の夫は始めから終わりまで、どの作品も喜んで見てくれました。新しい傑作がガラス板の上に浮かび上がるたびに、それを持って彼のところに走り、彼が心から褒めてくれるのを聞くのが私の日課でした。この濡れた写真をもって居間に駆け込む私の癖から、何枚とも知れないテーブルクロスが硝酸銀の頑固なシミで台無しになりました。もっと寛容でない家族だったら、私はとっくに追い出されていたはずです。

われわれの親友、Henry Taylor 卿は私の初期の作品に大いに力を貸してくれました。私の言うままにポーズを取ればバカを見るかも知れないなどお構いなく、自らを顧みない愛情からの広い心遣いで、次つぎと付き合ってくれました。火掻き棒を笏の代わりに握って Juliet を相手に Laurence 修道士（中崎注：「ロメオとジュリエット」）を、Miranda を相手に ミラノ公 Prospero（中崎注：「テンペスト」）を、女王 Esther と共に Ahasuerus 王（中崎注：旧約聖書「エステル書」）を、私の望みに合わせて演じ



てくれました。この偉大な良き友人に対しては次の詩句がピッタリです。

私利の弦（いと）は震えつつ、  
調（しらべ）のごとく消え去りぬ。

これで私の写真が完成しただけでなく、この「Prospero & Miranda」からある結婚が生まれたです（中崎注：Mary Ryan と Henry Cotton との結婚）。この結婚が伝説の Cophetua 王の富と幸福を結び付けるようになって欲しいものです。王は Miranda に自分の王冠を飾る宝石と同じ価値を認めたのです。

写真を見て心を打ち明ける決心がついて、18ヵ月の交際の末にお互いの理解が成立して結婚し、この世で考えられるもっとも牧歌的な結びつきが生まれたのでした。さらに大切なのは、この幸せな結婚の結果この母親に似て、美しい写真を撮るにふさわしい子供が生まれたことです。もっとも父親も目立ってハンサムで、ギリシャ風の容貌と色白で血色のよいサクソン風の肌色であるのを、付け加えなければなりません。

私の家のお手伝いさんの中に少女のときから、とても奇麗だった娘さん（中崎注：Mary Hillar）がいて彼女がよく私のモデルを勤めてくれました。彼女の顔をいろんな風に撮ったのですが、いつもその優雅さの損なわれることはありませんでした。この秋に彼女の顔を美しい Maud（中崎注：Tennyson 「国王の牧歌」）に装いました。

籬（まがき）なる情熱の花より、  
したたり落ちる輝ける涙。

その姿は10年前の私の「マドンナ」のように純粹で完全でしたが、その表情には10倍もの情念がこもっていました。いつか詳しく書きたいと思いますが、言うなれば彼女の異常なまでの性格と心の複雑さは、わが家と親密に付き合い願った人びとの驚きの的でもありました。

さて私は私の写真について大変に貴重な手紙を戴いて喜んでいますが、その中の面白そうないくつかを、書かれた方のお許しを得て紹介してみましよう。

ベルリンの大変に親切な方（中崎注：増感色素の発見者 H. W. Vogel）は熱心で、彼にはいつも感謝をしておりますが、この方は外国語で手紙を書かれるときに辞書をひいておられるに違いありません。そこでは1つの言

葉に2つ3つの意味が書いてあり、このどれかを選択して使うので結果がコミカルな物となります。私は全ての言語が流暢にあやつれたら、どんなに良かろうと願うだけです。

「Mr. \_\_\_\_\_ announces to Mrs. Cameron that he received the first half, a Pound Note, and took the Photographies as Mrs. Cameron wishes. He will take the utmost sorrow (1) to place the pictures were good.

Mr. \_\_\_\_\_ and the Comitie regret heavily (2) that it is now impossible to take the Portfolio the rooms are filled till the least winkle (3). The English Ambassude takes the greatest interest of the placement the Photographies of Mrs. Cameron and Mr. \_\_\_\_\_ sent his extra ordinarest respects to the celebrated and famous female photographs. Yours most obedient, etc.」

この手紙の親切さと心遣いは明らかで、誤りは次のようにたやすく説明できます。

(1) 本当は「care」(世話)が正しい。英語「care」のドイツ語「Sorgen」には「sorrow」(心配)の意味もあります。

(2) 「regret」には「heavily」より「severly」か「seriously」がよいでしょう。

(3) ドイツ語「Winkle」(角度, 片隅)。英語では「corner」と使います。

この手紙は女性芸術家に対するあるドイツ人の礼儀正しさをそのままに、大変に丁重に結ばれています。ドイツは私に榮譽を与え親切を示してくれましたが、この国との良好な関係に花を添えるように、さらに好運にもドイツとプロシアの皇太子夫妻の写真が撮れるという特権まで与えてくれました。

このドイツ人の手紙にはある洗練さがあって、この人を笑うのではなく、この人と一緒に微笑できるようです。

だが、あるイギリスの手紙が誘い出す笑いには同感できない面があります。一例を挙げましょう。

「Miss Lydia Louisa Summerhouse Donkins informs Mrs. Cameron that she wishes to sit to her for her photograph. Miss Lydia

Louisa Summerhouse Donkins is a Carriage person (中崎注：自家用馬車のある階級), and therefore, could assure Mrs. Cameron that she would arrive with her dress uncrumpled.

Should Miss Lydia Louisa Summerhouse Donkins be satisfied with her picture, Miss Lydia Louisa Summerhouse Donkins has a friend who is also a Carrige person who would also wish to have her likeness taken.]

私はこの Lydia Louisa Summerhouse Donkins 嬢に手紙を書いて、Cameron 夫人は職業写真家ではないので残念ながら「肖像写真は撮れません」(take her likeness) と返事しました。また Cameron 夫人が写真を撮るとすれば、ドレスは皺のままをずっと好むでしょうと付け加えました。少しは芸術なる物を教えたので親切だったかも知れません。しかし私はこの手紙を貼り付けたこの人の写真を撮らなかったことを一度ならず残念に思ったことでした。

これは私が「L. H. H.」(中崎注：ロンドン Little Holland House) にいた時のことです。あの偉大な Carlyle の写真を撮るのに、ここにカメラを移していたのです。こんな人物のまえにカメラを据えると、私の全精神はこの人物の外貌はもとより、内なる偉大なものを忠実に記録するのが、その人に対する私の義務だと思って努力しました。こうして撮られた写真はほとんど私の祈りを具現した物と言えます。この感情をもっとも真剣に抱いたのは私の尊敬し愛するあの有名な友人 John Herschel 卿の写真を撮った

ときです。彼は私にとって「恩師」で「尊師」でした。私はずっと子供の時から彼を愛し尊敬しておりました。そして 31 年の交際のすえに彼の写真を撮り国民に示すという重大な責務が私に課せられたのです。まだ写真が Talbot-type や「autotype」(中崎注：ダゲレオタイプの誤り) の幼児期にあったときから彼は私に手紙をくれました。そのころカルカットに住んでおりまして、未開の土地へ向けての科学的発見の報はまるで飢えた人間の乾いた唇への水のようにでした。率直に表明された友情から受ける喜びは言うまでもありません。

私がイギリスに帰りますと自然に交際が復活しました。私はすでに彼の

娘さんの 1 人の名付親 (godmother) になっていましたが、彼もまた私の末息子の名付親 (godfather) を引き受けてくれました。私の息子の介添役の 3 人が後見人を立てることもなく、私と私の夫に対する真の愛情から本人で洗礼盤のまえに立ってくれた日は、本当に記念すべき日となりました。John Herschel 卿, Henry Taylor と私の妹 Virginia Somers が Mortlake 教会の小さな洗礼盤を囲んで集まってくれたときは、これ以上に詩, 哲学, 美にピッタリの物はありませんでした。

私が写真をはじめたとき最初の成功をこの尊敬すべき友人に送りました。私の成功に対する彼の「万歳」(hurrahs) をここに掲げます。日付は 1866 年 9 月 25 日です。

「親愛なる Cameron 夫人:

この最近のあなたの写真は素晴らしい。2 つの方向に素晴らしいのです。『Mountain Nymph, Sweet Liberty』の顔 (始めは開放された喜び, やがては嬉しすぎて半ば戸惑っている。『farouche』〈ビクビク〉『égarée』〈オロオロ〉の感じ) はまさに浮き彫りの傑作でしょう。彼女はまさに生きているようで、紙の中から頭を外に突き出しています。これは、あなたの独特のスタイルです。別の『Summer Days』は趣きが違います。全く違っていますが大変に美しくそのモデルの配置は完璧です。『Proserpine』も素晴らしい。彼女が『もっとも美しい花』(herself the fairest flower) なら『Gloomy Dis』(陰惨な冥王) に摘み取られるところは、地獄の深い影を単に色だけでなく彼女の顔の形や表情に投げかけています。『Christable』の方はちょっとよく分かりませんが、大きな横顔は素晴らしい。つづめて言えば、あなたは新しく仕事をするたびに、殻をやぶる決心をしているように思えるのです。」

その間に私はまた別の不朽の人の肖像を撮りました。これは Alfred Tennyson のもので、その横顔の写真は彼が「Dirty Monk」(汚い修道僧) と呼んだものです。これはイザヤとかエレミア (中崎注: 旧約聖書の預言者) にピッタリの写真で Henry Taylor は Tennyson の最高の詩と同じほど優れていると言ってくれました。この桂冠詩人はこれについて Mayall (中崎注: アメリカ写真家) の物を除けば、これまで撮られたどの写真より好きだと言っております。この「except」(除けば) の意味は明らかです

が、この比較はむしろコミカルです。これは Tussaud 夫人の蠟人形と Woolner（イギリス彫刻家）作の堂々たる胸像と較べるようなものだからです。同じときに Watts 氏は大変に励ましてくれて、これで私は翼を得て翔ぶ思いをしたものでした。

## 文 献 と 注

- (1) Helmut & Alison Gernsheim, *The History of Photography*（以下に Gernsheim「History」と略す）Thames & Hudson, London, 1969.
- (2) J. M. Eder, *Geschichte der Photographie*（以下に Eder「Geschichte」と略す）Wilhelm Knapp, Halle, 1932（Arno Press Repr. 1979）
- (3) ポール・ヒル, トーマス・クーパー著, 日高, 松本訳「写真術—21 人の巨匠」晶文堂, 1988 年 9 月。
- (4) Helmut Gernsheim, *Julia Margaret Cameron*（以下に Gernsheim「キャメロン」と略す）Aperture, New York, 1975.
- (5) Helmut Gernsheim, *Lewis Carroll, Photographer*（以下に Gernsheim「ルイス・キャロル」と略す）Dover Pub. Inc., New York, 1969.
- (6) Martin Gardner, *The Annotated Alice with an Introduction and Notes*（以下に「注釈アリス」と略す）（Meridian Book）New American Library Inc., New York, 1974.
- (7) 中崎昌雄「咸臨丸の福沢諭吉と『写真屋の娘』—『ダゲレオタイプ』と『アンブロタイプ』」福沢諭吉年鑑, 第 13 巻, 180（1986）
- (8) 中崎昌雄「Talbot『カロタイプ』写真術発明をめぐって—写真『潜像』とその『現像』の発見」中京大学「教養論叢」第 29 巻, 第 3 号（通巻 84 号）587（1988）
- (9) 中崎昌雄「だれが初めて『ハイポ』（チオ硫酸ナトリウム）による写真『定着』を発見したのか？—J. B. Reade 対 John Herschel」中京大学「教養論叢」第 30 巻, 第 3 号（通巻 88 号）663（1989）
- (10) 中崎昌雄「1839—1842 年における John Herschel 写真研究—青写真と『Herschel 効果』の発見」中京大学「教養論叢」第 31 巻, 第 1 号（通巻 90 号）13（1990）
- (11) Günter Buttman (B. E. Pagel trans.) *The Shadow of the Telescope*（以下に「ハーシェル伝」と略す）Litterworth, London, 1970.
- (12) 中崎昌雄「『ダゲレオタイプとジオラマ』—手法の歴史とその実際—『ダゲレオタイプ教本』解説と翻訳（上）」中京大学「教養論叢」第 32 巻, 第 2 号（通巻 95 号）439（1991）；中崎昌雄「『ダゲレオタイプとジオラマ』—手法の歴史とその実際—『ダゲレオタイプ教本』解説と翻訳（下）」中京大学「教養論叢」第 32 巻, 第 3 号（通巻 96 号）783（1991）

- (13) 中崎昌雄「コロジオン湿板からゼラチン乾板へー写真感光材の進化」中京大学「教養論叢」第33巻, 第1号(通巻98号) 39 (1992)
- (14) 中崎昌雄「Talbot『写真特許』とその問題点—1841, 1843, 1849, 1851年特許」中京大学「教養論叢」第29巻, 第4号(通巻85号) 949 (1989)
- (15) Helmut & Alison Gernsheim, *L. J. M. Daguerre* (以下にGernsheim「ダゲール」と略す) Dover Pub. Inc., New York, 1968.
- (16) 中崎昌雄「Talbot 写真裁判と化学者たち—A. W. Hofmann ロンドン時代」中京大学「教養論叢」第31巻, 第2号(通巻91号) (以下に中崎「写真裁判」と略す) 485 (1990)
- (17) 中崎昌雄「世界最初の『写真』画集—Talbot『The Pencil of Nature』」中京大学「教養論叢」第28巻, 第3号(通巻80号) 673 (1987)
- (18) 中崎昌雄「F. S. Archer『コロジオン法』発表(1851年)をめぐって—新しいガラス写真時代の始まり」中京大学「教養論叢」第30巻, 第1号(通巻86号) 1 (1989)
- (19) 中崎昌雄「George Eastman と ロールフィルム写真術—イーストマン・コダック社創設」中京大学「教養論叢」第34巻, 第1号(通巻第102号) 145 (1993)
- (20) Gernsheim「History」図版219.
- (21) 中崎昌雄「だれが初めて没食子酸による『潜像』の『現像』を発見したのか?—J. B. Reade とその写真研究」中京大学「教養論叢」第30巻, 第2号(通巻87号) 327 (1989)
- (22) 中崎「写真裁判」p. 540.
- (23) Gernsheim「History」p. 234.
- (24) Robert Taft, *Photography and the American Scene, A Social History 1839–1889* (以下にTaft「アメリカ写真史」と略す) Dover Pub. Inc., 1964, p. 123.
- (25) Taft「アメリカ写真史」p. 153.
- (26) 中崎昌雄「立体鏡の発明と写真術—Wheatstone 対 Brewster 論争」中京大学「教養論叢」第34巻, 第2号(通巻103号) 463–530 (1993)
- (27) Gernsheim「History」p. 293.
- (28) Gernsheim「ダゲール」p. 118.
- (29) N. Gosling, *Nadar*, Secker & Warburg, London, 1976.
- (30) Roy Meredith, *Mr. Lincoln's Camera Man – Mathew B. Brady*, Dover Pub. Inc., New York, 1974. 中崎昌雄「Edgar Allan ポオ肖像写真の『左右問題』」中京大学「教養論叢」第27巻, 第1号(通巻74号) 1 (1986)
- (31) Gernsheim「ダゲール」p. 95.
- (32) Helmut Gernsheim, *The Origins of Photography*, Thames & Hudson Ltd., London, 1982, p. 262.
- (33) Gernsheim「History」p. 245.
- (34) Beaumont Newhall, *The History of Photography, from 1839 to the Present*

（以下に Newhall 「History」 と略す） The Museum of Modern Art, New York, 1982, p. 75.

- (35) ダーウィン著，浜中浜太郎訳「人及び動物の表情について」（岩波文庫）岩波書店，昭和6年1月；Gernsheim「History」図版106.
- (36) 「世界写真全集」第10巻「19世紀アンティーク・フォト」集英社，1989年5月，p. 93.
- (37) 東京都写真美術館「写真の黎明」1992年，図版56.
- (38) M. Weaver ed., *British Photography in the 19th Century*, Cambridge Univ. Press, 1989, p. 139.
- (39) 「世界写真全集」第10巻「19世紀アンティーク・フォト」集英社，1989年5月，p. 119.
- (40) 「グランド世界美術全集」第22巻「ロートレックと世紀末の美術」講談社，1974年12月，図版12.
- (41) *Dictionary of National Biography*（以下に「DNB」と略す）22, p. 567.
- (42) 定松 正編「ルイス・キャロル小事典」研究社，1994年7月.
- (43) Gernsheim「ルイス・キャロル」p. 94.
- (44) 鎌田弥寿治「写真製版術」（写真技術講座 第6巻）共立出版，昭和31年1月，p. 8.
- (45) 小田千秋「テニソン」（英米文学評論叢書 第48巻）研究社，昭和55年6月.
- (46) Lewis Carroll, *Alice's Adventures Under Ground*, Dover Pub. Inc., New York, 1969.
- (47) 「注釈アリス」p. 23.
- (48) Gernsheim「キャメロン」p. 9.
- (49) Gernsheim「ルイス・キャロル」図版1.
- (50) 「注釈アリス」Gardner 序文.
- (51) *Phot. Notes*, 9, 171 (1864)
- (52) Gernsheim「ルイス・キャロル」p. 60.
- (53) 「DNB」3, 762.
- (54) 「DNB」3, 740.
- (55) この家の写真は次を見よ。Gernsheim「キャメロン」p. 24.
- (56) Gernsheim「キャメロン」p. 25.
- (57) *Phot. J.*, July 1865, p. 117.
- (58) Beaumont Newhall, *Photography—A Critical History*, 1938, p. 55.
- (59) P. H. Emerson 論文，*Sun Artists*, London, 1891.
- (60) 中崎昌雄「初期写真レンズの開拓者たち」中京大学「教養論叢」第35巻，第2号（通巻107号）479（1994）
- (61) Hardinge は60歳定年退職後にオックスフォード大学1年生からやり直し，1910年に学士号をとって卒業した。Gernsheim「キャメロン」p. 21.

- (62) エアロン・シャーフ編・著, 小沢訳「写真の歴史」PARCO 出版局, 1979,p. 85;  
*Phot. J.*, May 15, 1869
- (63) Reade は Talbot と写真潜像の現像について優先権を争った。中崎「写真裁判」  
p. 551.
- (64) このクローズアップ写真は次にある。Gernsheim 「キャメロン」 pp. 59, 60.
- (65) Beaumont Newhall, *Photography: Essayes & Images*, The Museum of  
Modern Art, New York, 1982, p. 112.
- (66) Gernsheim 「キャメロン」 p. 67.
- (67) Gernsheim 「キャメロン」 p. 69.
- (68) Gernsheim 「ルイス・キャロル」 p. 22.
- (69) Gernsheim 「ルイス・キャロル」 p. 23.
- (70) Gernsheim 「ルイス・キャロル」 p. 100.
- (71) Gernsheim 「ルイス・キャロル」 p. 31.